

自分の焰牙が拳だった 件

ヒヤツハ一猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれ変わったけど、育つた場所は劣悪極まりない貧相な環境だつた。そんな中で生
きた彼はある時ゴスロリの少女に目をつけられてしまう。そして、あれよこれよと昊陵
学園へと入学させられる。その右手にシエルブリットを引っ提げて。

目

次

ファースト・ブリット	112
セカンド・ブリット	99
サード・ブリット	88
フォース・ブリット	76
ファイフス・ブリット	63
シックス・ブリット	50
セブンス・ブリット	35
エイス・ブリット	23
ナインス・ブリット	1

ファースト・ブリット

『願わくば、汝がいつか【絶対双刃】へ至らんことを』

アブソリュート・デュオ

それを聞いて自分は頬に汗を垂らす。寧ろ、目の前にいるこの黒髪でゴシック・ファッショとロリータ・ファッショを合わせた……つまり、通称『ゴスロリ』と呼ばれる服に身を包んだ幼女？ 少女？ とにかく、まだ年端のいかない彼女を目の前にした時点で背中や額から汗が滲んでいた。

嫌な予感しかしないのだ。自分がこの世界に生まれ変わつてから身体に染み付いた、危険を察知する直感が五月蠅く警報を鳴らしている。

コイツに着いて行けば絶対口クな事に巻き込まれない！

自分が一步足を退くとその彼女の後ろに控えていた眼鏡野郎が指でクイッと眼鏡を上げる、そのムカつく仕草をしたと同時に何本もの『突錐剣』ステイレットと呼ばれる短剣が周りに出現する。

どうやら臆して一步下がつたことが相手には構えを取つたように見えたようだ。今まで感じて来なかつた殺気に足が竦みそうになる。表面上は何とも無いように見えるが裏は大混乱していた。

ヤベエって!? アイツ滅茶苦茶、強そうなんだけど!? 武器まで出しちゃつてさあ!?

最近、やけに統率がとれた変な奴らが多く襲ってきたのは記憶に新しい。それも似たような武器を持つて襲ってきた。

その時はとにかく必死で何とも疑問に思わなかつたのと、会う前から武器を所持していた奴らもいた。だが、こうして見て、感じて。

どこからそんな物取り出した? 抜き出す所も見えなかつたぞ。いや、違う。この状況に混乱し狼狽えていたとしても聞こえてきた一言。

確かにヤツは――

『焰牙』
ブレイズ

そう言つていた。

オイイイイイイ!

生まれ変わつてからクソ見たいな場所で生きてきたけど、今ハツキリと思い出した
わつ!!

この世界つて【アブソリュート・デュオ】じゃね……?

疑問系になつてゐるが確信に近いものが目の前にいる。というか、自分はよくあるご都合的な感じで、これまたよくある“転生”つて奴なんだろう。そうとしか思えない。生まれ変わる自体は望んだことじやないが、貰えるもんは遠慮無しで貰うタイプなので別に今更つて感じだ。それが同じ世界じやないとしても二度目の人生を与えたのだ。感謝こそすれ文句を言うわけが無い。

だが、もつとマシな産まれ育つ場所ぐらいくれ。

なんでスラムなんだ。

なんで無法地帯なんだ。

なんで日常的に銃や刃物を向けられないといけんのだ。

なんで平和な日本にこんなチャイナタウンみたいな所があるんだ。

取り敢えず、こつちも死ぬ氣で生きるつもりだから抵抗はする。こつちは武器も何も無いけどなつ！

銃を向けられようと、イノシシのように真っ直ぐ向かつて顔面目掛けて拳を叩き込む。刃物を向けられようと馬鹿の一つ覚えのように一直線に走つてこれまたぶん殴る。囲まれていようと取り敢えず目の前の奴から殴る。

自分はこの“拳”だけで生き残つたと言つてもいい。

いや、本当は銃とか使つてみたよ？ でも狙つた方向に絶対飛ばないんだよね。刃物を使つても殴つたほうが早いし。

つまり、結局の所、この目の前の眼鏡野郎に対して自分はこの拳だけで向かつて行かなくてはならない。しかし、相手は銃をもつた奴よりはるかに強い『超えし者』と呼ばれる超人。勝てる気がしない。

でも、もし。

これがご都合主義だとしたら俺にも力が……『焰牙』^{ブレイズ}があるはずだ。

今だけ、祈つてやる。感謝した事が一度しかない神に。後はもつとマシな所に生まれ変わらせろや、と呪詛を毎日送り続けた神に。今回だけは祈りを。

右腕を上に突き出して手を開く。この手に現れる自分の『焰牙』^{ブレイズ}——『魂』を思い描いて。この状況を打開できる為の武器が現れると信じて……ツ!!

「——『焰牙』ツ!!」

その『力ある言葉』に呼応してその右手の先——ではなく。

右腕全体が燃え盛る炎の焰に包まれていく。それは荒れ狂う激流のように右腕に絡みつき太陽と言つても過言では無い程の輝きを放つた。その焰は右腕の肩甲骨の辺り

まで及んでいた。

その余りにも熱い魂が、情熱がこの身を焼き尽くさんと雄たけびを擧げる。

「つぐ、ぐつがああああああああ！」

右腕が熱い!! なんだこれは!!?

だが、いくら痛くとも、今にも楽になりたいと思つても。

この『魂』がそれを許しはしない。

故に、自分はその『魂』に委ねた。

その時、まさにその『焰』が……『魂』が形を成して現れる。光が消え、その焼き付ける痛みは消えても自分は熱いまま。しかし、この熱さは違う。魂の火だと感じた。

右腕全体に覆われた金色と朱の混じった装甲。背中には三本の紅い羽根がある。

きっと、自分の髪は逆立つてゐるだろう。そして、お逃げ向きだ。^{つら}しかし、正しく今の自分の状況にとつては

いや、なんでだよ。

何でここでシェルブリット？　自分でば得物が出るとばかりと思つてたから手広げて待機してたのよ？

いや、確かに刀とか長物とか出てきても扱える気はしないけどさ。それでも今の現状をどうにかするにはこれしかない。

——チクショオ、こうなればやくけくそだ。

何もないよりましだ。見てみればゴスロリと眼鏡野郎が驚愕^{ブレイズ}の表情をして固まつていた。それは自分が焰牙^{ブレイズ}を発現させたからか。それともその焰の“形”を見てなのか。まあ、この世界に置いて自分は『異端者』だ。^{イレギュラー}そのせいで何かが変わつてしまつたとしても知らない。こつちは明日を生きるためにやるしかない。

「さあ！　さあ！　やろうぜ……ツ！」

自分の『魂』が叫び声を擧げる。自分はシェルブリットを本能のままに振るつた。

——喧嘩だアアアアアアッ！！

桜が舞い落ちる中、ある青年は氣だるそうに真つ直ぐ “こうりよう昊陵学園入学式場” と書かれた看板が立つてある講堂へと重い足を進めていた。

百八十は余裕でありそうな長身に、その体躯に見合つた手足。ボサボサの短髪でその下の顔を見れば鋭い目付きの三白眼が覗かせる。
もしこれが猫背ではなくて、さらにちゃんと髪をセットしていたなら、まだ少なからずマシな感じになつていただろう。

現に、何人かの同じ制服を着た生徒達が怖がつてそそくさと離れて歩いている。中にはコソコソと話している生徒もいるようだ。

しかし、彼は全く気にして様子も無く講堂へと真つ直ぐ向かうだけだ。否、ただ眠たいだけである。

あのゴスロリ野郎。何で自分が入学しないといけんのだ。何が『これも貴方の為です

わ』だ。俺の為ならホームグラウンドに帰して欲しいんだけど?

こんなあつちより危ない場所になる予定の学園よりかは、断然スラムの方がマシだ。先にある講堂を見ながらため息を吐く。

この世界がどういう場所かは知っている。しかし、細かい事まで覚えてないのだ。この先どうなるのか。何が起きるのか。どういった経緯でそれが起きたのか。

そういうつた事、全て記憶に無いのだ。

ただ、今のところ分かつているのは主要なキャラの立ち位置や話の流れ。そして、これは勘だが、この先はロクなことが起きないであろう、としか。

ただ、先ほど言つたように、ここが中心点となるならば自分がいた不法地帯より危険な場所になると予想できる。

だつて、『超えし者』^{イクシード}を育てる教養機関だぜ? 絶対、死者とか出るつて。

まあ、可愛い子も多いしまた高校生活を送るのは嬉しいけどねつ!

……彼女とか絶対無理だろうなあ。

考えてみても主人公ハーレムだつたし。こんな目付きだし、人を一人二人殺つてそ

な目だし。半殺しはしたけど一人も殺つてないから。

それに下手に介入しよう物なら原作の流れというのが崩れるのでは無いだろうか?

そして、主人公が死んで、バットエンドになるなんて目も当てられない。

まあ、ただただ自分は主人公のイチャイチャするのを見せつけられるモブの一人でいい。イラつく事があるかもしれないが、それで済むならそれでいい。

しかし、それも何度も見せつけられるようであれば一発殴りたい。というかこういう状況を作つた朔夜に文句を言いたい。よし殴ろう。あの眼鏡野郎を。

何て心の中で理不尽な事を考えていたら前に突つ立つていた人とぶつかつてしまつた。

「——おつと、悪い。前、見てなかつたわ」

驚いたようにこちらを振り向いたのは同じぐらいの身長をした同性で短髪。振り向いて見えた相貌は中々のイケメンである。それも、しかめつ面をしていてもイケメンと言える。

なるほど、リア充予備軍か。どこ見てほつき歩いてんだ、ああん？……て、そ
れは俺か。

「あ、ああ。こつちこそすまない」

なんか引かれてるんですけど？　まあ、こんなヤバそうな目をした奴が後ろにいたらそ
うなるか。

さっさ、中に入つて軽く寝よ。

目の前の男子生徒を通り過ぎて講堂へと入る。中には疎らだが何人か入つており、隣の生徒と談笑していたり、しおりを見ていたりしている。

自分も指定された席に行くと隣には既に先客がいた。何だかいにも真面目そなうな生徒だ。こつちを一目見てすぐ手元のしおりに視線を戻す。

だが、一瞬動搖していたのを見逃さなかつた。初対面だとほぼ怖がられるな、と少し心に傷を負いながら椅子に座つた。

……あれ？ さつきの男子つて主人公じやね？

今さらながら気がついてしまつた。

腰まで届く銀色の髪^{シルバーブロンド}に透き通るような雪色の肌^{スノーホワイト}。故に際立つ深紅の瞳^{ルビーアイ}は、一目で異国^{ルビーアイ}の少女だとわかる。

そんな幻想的な容姿の美少女に見惚れていた時だつた。

「おつと、悪りい。前、見てなかつたわ」

後ろからぶつかられて前のめりに倒れそうになるが、直ぐ持ちこたえる。荒い口調で

謝られたので、少し不機嫌になりつつもこつちも、ぼーっとしていたので非はある。

しかし、振り返って見れば自分より少し高い位置にある顔で、今にも襲つてきそうな目付きをした男子生徒。こちらを見下ろすその視線に圧を感じた。

「コイツ……」何者だ？

ここに来る途中に何人か生徒を見たが、こんな目をした奴はいなかつた。明らかに敵意を感じつつも、一応こちらも謝る。

「あ、ああ。こつちこそすまない」

戸惑いを隠せずに謝つてしまつたが、その男子生徒は一瞥しただけで横を通り過ぎて行つた。

「何アイツ、感じワル」

いつの間にか隣にいたポニーテイルの女子がため息混じりに呟く。

確かに態度は良くなかったが、謝つてきたので少なくともマシと言える。もしかした

ら、ただ目付きの悪いせい、と言うこともある。人は見た目だけでは無いのだから。
「…………。ねえ、せめて相づちくらい打つてくれないかなあ？」

肩をとんとん、と叩かれて初めてその女子の方を向いた。

「もしかして、俺に言つてているのか？」

「他に誰がいるわけ？」

彼女と自分の周りを見てみれば、確かに近くにいるのは自分しかいなかつた。

「……すまない、悪かつた」

謝罪すると、女の子は笑みを浮かべた。

「ふふつ、案外普通に話せる相手つてことかな」

「は？」

「君つて、さつきからず一つとしかめつ面してたから、さつきの奴みたいなちよいワルなのかなつて思つてさ」

「ちよいワルつて……」

確かに色々と考え事をしていたから、不機嫌そうに見えたかも知れないが、先ほどの男子生徒と一緒にされるのは余り嬉しくなかつた。

「あー……悪かつたよ。ちよつと考え方してたんだ」

「その考え方も、異国の美少女には勝てなかつた、と」

「ははつ、そういうことになる」

悪戯いたずら そうな笑みを浮かべてのツツコミに苦笑いをする羽目になる。

「まつ、同性とはいえその気持ちはわかるけどね。あんな綺麗な子だもん、目を惹かれて当然だよね。……でも、どうしてわざわざこんな学校へ入学して来たのかな」

こんな学校、とポニーテイルの女子が言うのは訳がある。

今日から自分が入学する吳陵学園は一般的な学校と違い、特殊技術訓練校という面がある。この学校で行われる特殊技術訓練とは即ち

——戦闘訓練。

平和な日本において、日常的に必要としない技術を教えるという特異な学校だ。

「何か事情でもあるのだろう」

そんな事がなければ、こんな学校に来ない。ましてや、『超えし者』になるなど……。

——『超えし者』

それは、数年前ドーン機関という組織が開発した『黎明の星紋』^{ルキフル}という名の生体超化ナノマシンを投与された者のことを指す。

千人に一人と言われる『適性』^{アブト}を持った者へ投与すると、人間の限界を遥かに超えた身体能力を得ることができ、同様に超化された精神力によつて『魂』^{ブレイス}を『焰牙』^{ブレイズ}と呼ばれる武器として具現化させる能力も得る。

簡単に言えば、特殊な力を持つた特殊部隊といった感じだろう。ここはその隊員を養成する学校と言うことだ。

「えつと、妙な感じになつちやつたけど、取り敢えず自己紹介つてことで。私は永倉

伊万里

「俺は九重透流。よろしくな、永倉」

「伊万里でいいわ、透流」

パチリとウインクをし、伊万里が笑みを見せる。こうして互いに名乗りを交わした。「つて、そろそろ中に入らないと」

「ああ、そうだな」

伊万里が先導して自分達も講堂に入つていった。自分達が座つた頃には殆ど席は埋まつており、中には舟を漕ぎだした生徒達もいた。

その中に先ほどのぶつかつた男子生徒も見えた。左右の椅子に座つている生徒が若干距離をとつてゐるが分かる。

やはり、人というのは第一印象は大事なのだろう。

「あ、入学式が始まるみたいね」

ちようどスピーカーのスイッチが入り、マイクテストの声が講堂に響く。壇上へ続く階段脇に立つた二十代後半と見られる男性教師らしき人物——三國が進行を行う。

壇上に上がつてきたのは、先ほど自分に『黎明の星紋』ルキフルを投与した黒衣の少女だつた。『昊陵学園へようこそ、理事長の九十九朔夜ですわ』

投与のときですら驚いていたというのに、あの子が理事長だという事実と、わざわざその立場の人間が自分に投与したのも驚きだつた。やはり、自分の『焰牙』と関わりが……？

驚きから半ば呆然として、理事長の式辞が耳に入つてこなかつた。しかし、式は何の滯りもなく進んで言つた。

そんな中、トラと言う友人がいたり、『黎明の星紋』の話をしたりと時間が過ぎていつた。

『願わくば、汝がいつか【絶対双刃】アブソリュート・デュオへ至らんことを』

そして、理事長が再びあの言葉を口にした。しかし、式辞を終えたにも関わらず、理事長は登壇したままだつた。

その不思議に答えるように理事長が再び口を開く。

『これより、新入生の皆さんには当学園の伝統行事【資格の儀】を行つて頂きますわ』
「伝統行事？」

「進行表には何も書かれてないけど……」

壁に張られた進行表を見る限りは、次は在校生代表による歓迎の挨拶なのだ
が……。

『それでは【資格の儀】を始める前に貴方達にして頂くことがありますわ。隣に座る方を確認して下さいませ。その方がこれよりの儀を行うに当たり、パートナーとなる相手ですの』

伊万里は自分を見て、自分は伊万里を見た。

『これより、貴方達にはパートナーと決闘して頂きますわ』
 「なつ……!?」

行事の内容を伝えられた瞬間、そこかしこで驚きの声が上がった。

『此れより、開始する伝統行事【資格の儀】は、昊陵学園への入学試験ということになりますの。勝者は入学を認め、敗者は黎明の星紋ルキールを除去し後、速やかに立ち去つて頂きますわ』

自分達の驚きとは正反対に、涼しげな顔で理事長がとんでもないことを口にする。一瞬、会場内が静まりかえり……やがて言葉の意味を理解すると、新入生がざわめきだす。

「い、いくら戦闘技術訓練校だからって入学初日から!? それに入学試験つて何よ!
 【適性】アブトがあれば誰でも入学出来るんじゃなかつたの!?」

「そこは僕も気になる。大体、そんな伝統があるなら入試に落ちた人から、何らかの情報があつてもおかしくないんじやないか?」

しかし、その問い合わせたのは理事長ではなく、進行役の三國だつた。

『入学試験が存在しない、などとお伝えした憶えはありません。【適性】があれば入学資格があるとお伝えしたことは確かですがね。そして、情報に関しては、当学園の内情は様々な形で情報規制を行わせて頂いているのですから』

薄笑いを浮かべながら、簡潔に説明する様は一流の詐欺師と遜色ないとさえ思える。

『バ』理解頂けたのでしたら、試験のルールについて説明をしますわ』

未だ、動搖と困惑している新入生に理事長は淡々と説明をする。

基本的に何をしようとも自由。それこそ『焰牙』の使用は勿論のこと。決着はどちらかの敗北宣言、もしくは戦闘不能とこちらが判断した場合。また、制限時間内に勝敗が決まらないのであれば両方とも不合格というものだつた。

しかし、ルールを説明しようと新入生が納得する訳が無かつた。次々、怒声が飛び交う。

「負けたやつはどうなるんだよ!!」「ふざけるな!!」「責任とつてくれるわけ!?」
だが。

『……これは、どこにでもある入学試験ですわ。他人を蹴落として自分が生き残ると
いう、単純なルールに基づいて行われる生存競争、ごく一般的な受験戦争ですよ。時
期と内容は違えど、ね』

怒声すら意に介した様子も見せず、冷たい視線、冷たい言葉を放ち、その雰囲気に新
入生の声は封殺される。

『いつか必ず、貴方達には鬪う時が訪れますわ。超えし者イクシードとしてドーン機関の治安維持
部隊へ所属した後、時には命懸けともなるような鬭いが、必ず。……けれどもその時

は貴方達の都合でまつてくれませんの——と、ここまで言えばお分かりですわね』
「……【資格の儀】つてのは、最初の決断の時つてわけか』

『そのとおりですわ』

俺の言葉にくすりと理事長が笑う。

『もし当学園のやり方に納得が出来ないのでしたら、出て頂いて構いませんのよ。ただしその場合、当然のことながら昊陵学園への入学は諦めたと判断させて頂きますわ』
しん、と講堂内の空気が凍り付く。沈黙が講堂を支配する——

「え？ マジで？」

——ことは無かつた。

たつた一人だけ、言葉に反応し答えを返したのだ。講堂内はその一人に注目される。
短髪に三白眼の男子、それはさきほど講堂前でぶつかつた彼だつた。

「このまま出ていけば入学取り消しに……？」

その彼の質問に理事長は鋭い視線を送る。彼は少したじろぐ反応を見せ、身体の向き
は出口の方向に向いていた。

帰る気満々だつた。

『……ええ、先程の言葉に偽りはありませんわ。ただ、貴方がそのまま帰ると言うのなら……負け犬のとしての烙印を押されても構いませんわよね?』

「……あア?」

さつきとは打つて変わつて強い怒りを滲ませ、理事長へと向き直す。そこには逆鱗に触れられた龍が立っていた。その反応を見て理事長は初めから分かつていていたように話を進めた。

『それでは開始前に一つ、貴方達が心置きなく闘えるよう、焰牙^{ブレイズ}について補足の説明をさせて頂きますわ。焰牙^{ブレイズ}とは超化された精神力によって【魂】を具現化させて造り出した武器——故に傷つけることが出来るのもまた【魂】のみという特性を持っていますの。つまり攻撃した相手の精神を疲弊させるだけであり、肉体を傷つけ命を奪うことの無い制圧用の特殊な武器なのですわ』

それは自分が傷つく恐怖だけでなく、相手を傷つけるという恐怖を無くす、悪魔の囁きというものだつた。

これがどれほど新入生を安堵させ、迷いを揺さぶるものだつただろうか。動搖が広がる様子が目に見えてわかる。それと同時に一人、また一人、と決意を固める様子もまた、厄介なことになってきた。

理事長の言葉も最もだが、この試験を降りると言うのなら負け犬という烙印を押され

る、というのも闘う決意の起因となつた。

ここまで来て、入学出来ず、さらに惨めな思いをするぐらいなら闘う方を選ぶ。人間の闘争本能の当たり前の心理だ。

自分は迷っていた。内容を受け入れるか否かではない。このまま試験が始まれば、伊万里を蹴落とさなければならないことに対してだ。

今朝知り合つたばかりの相手で、小一時間、話した程度の仲だ。
だけど、自分は……。

その思いで自然と手を上げそうになつた時だ。

「何迷つてんだ、さつさと出せよ。お前の『焰牙』たましいをよオ」

「え、え」

彼だつた。彼のパートナーである男子は怯えて混乱しているようだつた。
「……時間はくれてやつた。それで負け犬になつても文句は言うなよ？」

彼が黒い指無しグローブを着けた右手を突きだして人差し指から順に曲げていき骨が軋むほど強く握り込む。その瞳の奥には炎のように熱い気迫のような物が写つていた。

それが、やる気だと本能的に理解したのは、それを向けられているパートナーとその

瞳の奥を見た者だけだろう。

【深淵を覗くとき、深淵もまたお前を覗いている】

その言葉を彷彿とされるように、講堂が彼の闘争本能に呑み込まれていく。そして、それに火を着けるように理事長が鋭い声でいい放つ。

『闘いなさい、天に選ばれし子らよ!! そして、己の未来をその手で掴みとるのですわ!!』

「——う、うわあああああっ！」

彼のパートナーが発した叫び声が合図となつた。何人かが悲鳴を上げて入り口へ逃げ出す。その場でパニックになる者もいた。

そして、この試験を、決闘を受け入れた者達は次々と『力ある言葉』を日々に叫び、あちこちに紅蓮の『焰』が発せられた。

そんな中、彼は『力ある言葉』を言わない。さつきは、ああ言つていたが、パートナーが『焰牙』^{フレイズ}を出すまで待つていた。

腰は引けているが長物の『槍』を構えて彼を睨んでいる。彼はニヤリと口元を緩めて嗤つた。

「いい目をすんじゃねえか。それじやあ、ヤろうぜ——」

「——喧嘩だアアアアアツ!!」

そう叫び声を上げて真っ直ぐ突っ込んだ。そこに常人では見切れないほどの速さで槍イクシードが突きだされる。例え、彼のパートナーが槍など扱つたことなど無くとも、『超えし者』の身体能力は馬鹿にならない。

理事長は肉体を傷つけないと言つたが、それでも危険な物には変わり無い。故に、自分も咄嗟に叫びそうになつた。

しかし、彼は槍を紙一重で避けると、そのままの勢いでパートナーの顔面に拳を叩き込んだのだつた。キレイな一回転を決めて地面に落ちるパートナー。

「……は？ マジ？ 嘘だろ？」

そして、何故か彼が啞然としていた。

セカンド・ブリット

『冥陵学園』

東京湾北部、懸垂型モノレールでのみ立ち入ることの出来る埋め立て地に存在する。周囲を巨大な石壁に覆われ、そのサイズに見合った門が唯一の入口となつていて、敷地の中央には学外からも臨むことの出来る時計塔がそびえ立っていた。

校舎や学生寮など内部の建造物は馴染みのない西欧風で、学校と言われると少々違和感を覚えてしまう。無論、内装も同様であり、まるで洋館を思わせる内装の廊下をポケットに手を突っ込んで堂々と真ん中を歩く。

周りには誰一人いない。本来なら声など聞こえて来るであろう校舎には自分以外……一年生や三年生たちが居るだろうが、今ここに自分一人だけと思えるほど静かであった。

それもそうだろう。自分のパートナーであつた彼をぶつ飛ばしたのだが、それが試験合格者第一号と言つた所なのだろう。事実、自分達が一番最初に始めたと言つても過言では無い。

これつて主席というヤツではないだろうか？ そうなると面倒だと思う。まさか、主

席だから挨拶や委員長などしないといけない制度等があつたらやる気なんて起きない。

というか、山田アツ！（仮名）お前弱すぎだろ!? スラム^{アツチ}にいた時からのクセで避け
て拳を叩き込んだけどさあ……一発でダウンするとか考えられん。あれぐらいな
ら、俺が居た所じやあ平氣で立つて反撃してくるんだけどな……なんだかなあ。

本来であればそのまま山田（仮名）の『焰牙』^{ブレイズ}を受けてそのまま不合格となつて帰る
つもりだつた。あの時、朔夜の一言で残つてしまつたが、こんなことになるなら負け犬
で良かつた。あそこで生まれ育つた時点で負け犬みたいなもんだと言うのに。

意外と自分は煽り耐性が低いらしい。うーん、でも生まれ変わる前の自分とはこんな
にも荒々しい性格してたつけ？ 薄れて殆ど覚え出せないが、どこかそれなりの大学に
入つていた記憶があるのだが……ああ、そうそう、医大だ。

スラムにいたとき、やけに何が危険な物で何が良くない物なのか理解していたが、今
思えば大体人体に影響ある物ばかりに反応していた気がする。

それに、どこをどう曲げたらキレイに骨が折れるのか、もしくは外すことが出来るの
か。どこに衝撃を与えたら内臓にダメージが入りやすいか。人体構造について自分は
とても詳しかつた。

なるほど、なんで今ごろ思い出したのか分からんがこの際どうでもいい。多分、今の
所周りを警戒する必要が無くなつて頭の方に気を回す事が出来るようになつたからで

あろう。あつちだといつ銃弾やら剣やら飛んで来るか分からんからな。

そうそう、剣とかでまた思い出したが。

スラムで襲つてきたやけに統率がとれていた制服集団つてこここの卒業生やん。見覚えあるなあ、つて思つてたけどそりや連日見てれば嫌でも覚えるよね。普通の金属とかで出来た武器とは明らかに違うからな『焰牙』^{ブレイズ}つて。

最初は警察じやあもうどうにも出来ないから出しやばつて来たんだと思うけど、その先行部隊が返り討ちになつたから驚いたんだろうね。それから、まあ来るわ来るわ。そのうち、じようじじようじ、とか言いながら来そうな勢いだつたわ。

でも、『超えし者』相手に大きく立ち回る奴がいるから朔夜が出て来たんだろうなあ……自業自得じやん、俺。

今更、後悔をしつつ沈んだ気持ちで長い廊下を進んでいく。

「つと、ここか」

目的地である教室の前を通り過ぎになつていた。開けば当たり前だが教室には誰もいやしない。そろそろ耳鳴りがしそうなほど静かだつた。

室内に並んだ机は一人一人というわけではなく、二人分の机をくつ付けた横幅が広い物が均等に並んでいた。黒板や掲示板とかを見たが特に指定されているわけでもなさうなので、一番後ろの窓際に陣取つた。

誰もいない、喧騒も聞こえない。

「……なんかめつちや虚しい」

これが孤独ぼっちと言うヤツか……。

「…… 寝よ」

こんな惨めな思いをするのも朔夜のせいだ。あの鬼畜口りめ。ここまでして俺を虐めたいか。そんなの隣にいる眼鏡にしろよ。

まあいい。それより、これからどうしようか……。

これほど原作知識というのが役に立たない転生者というのは俺ぐらいじゃないか?と思えるほど、この先どういつたことが起きるか分からぬ。うん、まあ、どうにかなるでしょう。

とても高い声、こう……きやぴきやぴした声というか。何とも耳に来る声のせい
で微睡みの中にあつた意識がゆっくりと戻つてくる。伏せていた頭を上げると目の前
には、うさ耳をつけた女性の顔が視界いっぱいに覆われる。

「……あ？」

「キミキミ、初日から居眠りとはいひ度胸だね。校庭十周する？」

いまいち、状況が呑み込めてないがここは学校であるため、もう授業が始まっている
のかも知れない。つまり、ここは普通に謝つていたほうがいいだろう。

「……すんません」

自分が素直に謝ると何人かの生徒が「普通に謝つた」「謝つたぞ」と珍しい物でも見る
ような驚きを挙げている。

なんだ、お前等そんな顔をして。こんな見た目で謝つたらそんな珍しいか。目の前の
女性の視線から逃れようと横を見ると、こちらと目が合う見知った顔の男子とその男子
を見つめる銀髪美少女。

……チツ、初日からイチャイチャしやがつて。これだからリア充は。
「なんで舌打ちされたんだ……？」

「お前が怨みでも買うようなことをしたんじやないか？」
「してねえよ！」

違うぞ、前のちっこい男子よ。別にリア充が居るのは構わん。ただ、それをあからさまに見せつけて来るヤツが気に入らないだけだ。つまり、俺に限らず怨みを買っているのさ、主人公はな。^(彼)

しつかりと自分が起きた事を確認した女性は自分の席から離れていく。

「むう、本当は誠心誠意を込めて謝つて欲しかったけど、今回は特別に見逃してあげよう。月見先生に感謝するんだぞっ♪」

なんだこの先生、チヨーうぜえ。周りを見れば、皆も何とも言えない表情をしている。「さてさて、自己紹介で残つてるのはキミだけだよ？ 時間が押してるから早くしてね

」

ああ、なるほど自己紹介をしていたのか。それは悪いことをしたな。

「……九十九カズヤ。趣味は……特に無い、です」

皆の視線が刺さりつつも腰を下ろす。趣味は無い訳じやないが言わない方がいいだろう。喧嘩売つて来たヤツの金目の物を漁る趣味なんて。多分、趣味になるだろう。うん、小物集めみたいな感覚でやつてたし。

「キミだね～、一番早く試験に合格した子つて。『異能』と同じぐらい職員室で騒がれてたよつ！ 開校以来の早さつてことでね～、悪い意味でも騒がれてたけどねえ～」

え？ 悪い意味つてどいうこと？ もしかして山田（仮名）を殴つたのはまずかつた

か？ やつぱあの時、朔夜が『焰牙』のこと言つてたから使うべきだつた？ …… いや、俺の場合もつと酷くなるか。身も心もダメージ入っちゃうから。

「うんうん。自己紹介も終わつた事だし早速この学校の事を説明するねっ♪」

前から生徒手帳と学生証、そして寮のしおりが配られた。前の女子よ、そんなにビクビクしないでいいから。何もしないから、睨んでないからつ！！ 元々、こういう目なのが

!!

「全員に行き渡つたかな？ 校則、寮則については後ほど空いた時間で各自目を通しておかないと、めつだからね♪ あと、学生証はクレジットカードとして使えるからなくさないように注意するんだよー」

マジかよ、学生証がクレジットカード替わりか。時代は進んだもんだな。しかも月々十万円とは太つ腹だな。となると、特別国家公務員と同じような制度なのか？ ああ、そうか。だから卒業したら治安部隊に入隊しないといけないのか。一応、高校なんだから他にも進路とかあるだろう、と思つてたけど数年は治安部隊に勤務ないとダメってことね。まあ、そつとは言い切れんけど。

「はいはーい。気持ちは分かるけど静かにー。最後はうちのガツコの特別な制度と、寮の部屋割りの話をしたら今日は最後だから、騒ぐならその後でーってなわけで、まずは特別な制度について話しをするけど、すーべーく大事なことだからちゃんと聞くんだ

よー♪

パンパンと手を叩いて、注目を集めの月見先生。……胸でけえな。精神的にはいい歳だろうけど、やつぱり男の子やん？ しかも今ちょうど青春真っ盛りやん？ そりやあ、見るつて。

「うちのガッコには『紺双刃』^{デュオ}って言うパートナー制度が存在するのよ。パートナーってことから分かるだろうけど、二人一組になつて授業受けたりするわけ」

「はーん、さては俺に対するイジメだな？」どうせ後で二人組作つてくださいねーとか言うんだろう？ 見てみろ、俺の隣には誰一人座つてねえじやねえか。誰も俺とお近づきになりたくないってことだろ？ どうすんだよ、ちくしょー。どうせ、卒業後の治安部隊でチームワークが必要だからその連携を今の内からやろうつてことだろよ。

「うちを卒業すると、機関^{ドーン}の治安維持部隊へ所属するつて話はしつてるよね。そこの任務は常に二人一人組、もしくはそれ以上のチームで任務を遂行してもらつてるの」「……卒業後にいきなりチームで行動しろと言われても無理だろうから、学生のうちに慣れさせておく、ということですね」

「その通りつ。わかってるね、^{たちばな}橘さん」

ほれ見ろ。委員長みたいな凛とした女子が俺の思つてたことを言つたわ。分かつたなら氣づいて、後ろにボツチがいるから。

「さてさて、『絆双刃^{デュオ}』についてなんだけど、さつきも言つた通り二人でいろんな授業を一緒に受けてもらうわけね。で、その関係上、ちょーっと駆け足で悪いんだけど今週末までに正式な相手を決めて貰うんで、明日からの授業で自分に合つたパートナーを頑張つて見つけてねつてことで。ふあいとつ、おー☆……あ、もし決まらなくてもこつちで勝手に決めるから安心していいよー♪」

「ほうほう、なら安心か。まあ、俺となつたヤツは気の毒だが、仲良くしていこう。……自分で気の毒とか言うもんじやないな。流石に女子とかと一緒ににはならないだろうけど、不安があるなー。……おい、ちょっと待て。どう考えてこのクラスの人数、奇数なんだけど？ 全員で五十三人だけど？ あぶれるよね？ 絶対一人になるよね？」

「確定じゃない？ もう俺しか居なくない？ ほら、見る！ 何人か察してこつち見てくれるんだけど？ そんな目で俺を見るんじやねえ！」

「先生」

「んー？ どうしたの橘さん？」

「人数的に奇数なんで誰かが一人になりますが、どうすんですか？」

「おお！ 流石委員長！ 分かってる!!

「ああ、それならもう決まつてるから大丈夫だよつ

後で理事長直々にお達しがある

と思うからね』

……ああ、そうかい。確定してたんだね。朔夜^{アイツ}は俺に怨みでもあるのだろうか。両手を組んで机に肘を付き、その上に額を乗つける。結局、パートナーが居ても余り上手くいかないだろうけどな。

「理事長つてことは、やつぱり……」

「偶然じゃないよね？」

そうだよー、偶然じゃないよー。だつて戸籍無かつたからねー、一時はあの眼鏡野郎つて話だつたんだけど、相性が悪すぎてねー。新しいの作るのも面倒だからってことで九十九家の親族つてことになんたんだよねー……入学する前まで死ぬほど実験させられたわ。あのサディスト幼女め。

「……で、本題はここからなんだよねー。実はうちのガツコつて『絆双刃』^{デュオ}を組んだ後は、お互いをより深く知り、絆を強くするためにも出来る限り一緒に時間を過ごせーつて校則があるのね。まー何が言いたいのかつて言うのとお……寮で相部屋になるつてこと」

そうだろうな。より親密になつた方が絆は深まり^{ツーマンセル}一人一組やチームでの動きは格段と良くなるだろう。この身で味わつたからな。何が怖いかつて言うと、合図とか無しで連携してくるんだよな、マジ訳わかんねえよ。

てか結局どうなるんだろ。これほどパートナーと言うのを推しているのに俺は一人。朔夜には何かしら考えがあるんだろうけど全くアソツの考えている事が分からん。やつぱり、謎なんだよな……年齢も分かんねえし。

「——するかあああああああっ!!」

「ウエイ!! ビックリした! 何々、一体どうしたというのだ、我らが主人公。立ち上つて先生に怒鳴つてていると思える主人公。

「マジかよ!」

「あの子とか、いいなあ……」

「きやーつ、同棲よ同棲!!」

「同棲…… D O · U · S E · I ? え? パートナーが決まるまで隣に座つているやツと寮で相部屋なの?」

「ま、待つてくれ! いくら校則だからつて常識的に考えて色々と不味いだろ!」

「いいの、美少女と一緒に相部屋か。一度は憧れたシチュエーションだよね。」

「……入学式の最中に入試、しかもリアルファイトを行う学校がマトモだと思う?」「ごもつともです。そして、この学校の理事長もマトモじやないから覚えておくように。ありやあバケモンだよ。」

「つ! な、なら俺と九十九の相部屋じゃダメなのか!?」

その発言に注目が何故か俺に集まる。主人公にとつては最後の頼りなのか、もう目力がスゴイ。

「……先生、俺は一人部屋？」

「っ！」

「多分、そうだよー。パートナーが決まるまでねー」

「スマンな、主人公よ。これは多分原作通りにことが進んでるから、下手にいじくつちやダメだと思うのよ。だから、そんなに圧を飛ばすんじやねえよ。ホモに思われるぞ。

でも一人部屋か。そりや、そうだよね。だつて隣いないしね。もう別に一人でもいいけどさ、一つ思うんだけどよ……パートナーフて絶対決まらないよね？

サード・ブリット

「失礼しまーす」

如何にも上の人間が居そうな豪華な内装に大きすぎる部屋。目の前には朔夜にとても似合いそうにないオフィスデスクがあつた。そして、そのデスクの先の合成皮革で作られているであろう椅子に優雅に座る朔夜。

どうやら三國はいないようだ。

「初めての学校はどうでしたか？ クラスには馴染めそうかしら？」

「アンタは俺の母親か」

「書類上では保護者ですわ」

「それ、おかしいだろ」

目を細めてニタリと笑う朔夜の視線に悪寒が走る。そう、何故か書類上の身元では彼女が保護者として登録されている。自分より明らかに年下なのに。

そこは、もつとやりようがあつただろう。兄……とは言わずにも弟とか従弟とか。それこそ、朔夜の父が保護者でも良かつた気がしたのだが……まあ、複雑な家庭事情なのだろう、そうだろう。でなければ、こんなことおかしいに決まっている。

「立ち話もなんですし、そこにお座りなさいな」

朔夜に促されるままに向かいにある席に座る。あちらよりグレートは落ちているが、なかなか高価な椅子のようだ。

「先ほど教室で説明があつたでしようから省きますわね。ここに呼び出したのは『紺双刃』^{デュオ}すなわちパートナーの件ですわ」

このまま行けば自分はパートナーが居ないままになる。それだと、朔夜が強い執着を見せて『絶対双刃』^{アブソリュートデュオ}に反するのではないだろうか？

その為なら周りがどれだけ犠牲になろうとも構わない冷酷な一面を見せる朔夜がこのまましておくことは無いだろう。

「まさか、上級生から連れて来るつもりか？ それか三人組でも作るのか？」

「それこそ、まさか、ですわ」

朔夜は立ち上がり後ろの一面窓ガラスになつていて壁まで近づき、自身の学園を見下ろす。その目には一体何が映っているのか見当もつかない。天才を理解できるのは天才だけだ。

「アナタに似合う『紺双刃』^{デュオ}はいない」

「……は？」

自分に似合う『紺双刃』^{デュオ}がない？ 一体、どういうことだ。

「誰でも、というわけにはいかないのです。お互いがお互いを研磨していき、一人では決して行くことの無い……その先に行かなくてはならない。ですが、アナタは違う」深紫の色の瞳がこちらを見据える。飲み込まれていくような瞳の奥には黒くドロリ、とした『ナニカ』が見えた気がした。

『醒なる者』とはまた違う存在。調べてもその右腕のことは見当がつかない。たつた一人でその高みまで行つたアナタに『絆双刃』^{デュオ}は必要ないのです……先程の言葉は訂正しますわ、似合わないのではなく必要無い、と

「……なら尚更ここにいる意味が無さそうだけだな」

朔夜が目指しているものに対して自分は異質で邪魔な存在となるはずだ。自分はとにかく生き延びる為に必死こいただけであつて意図してこうなつたわけでは無い。

シエルブリット自体もダメ元でやつてみただけだ。そもそも、これが発現するとは思わなかつた。ある意味、自分は皮肉に思つたもんだ。

しかし、朔夜は表情を崩すどころかニコリと笑つた。

「一人だけでそこまで至つたアナタと……私の『絶対双刃』^{デュオ}……どちらがより優れているか気になりませんか？」

まるで玩具で遊ぶことにワクワクしている子供のような笑みだつた。

「それに、一人では無理でもチームであれば高め合うことが出来るでしょ。アナタと

言う一人に対して、彼ら二十六の『紳双刃』ならば

一人に対してもそれはねえよ。集団リンチと言うのを朔夜は知っているのだろうか？いや、ド、ガ付くほどのサディストである朔夜のことだ。分かつて言つているんだろう。やはり魔女の名は伊達じやない。

「……教育力リキュラムは二人一組が基本的じやねえのか？ そんときはどうすんの？」

「その時は先生が代わりの者を用意しますわ。安心しなきな、アナタなら一人で出来てしまふものばかりなのですから」

「そんな期待されてもな……まあ、やることやればいいんだろ？」

「こちらが提示されるものをこなしてくれれば、後は何をしても構いません」

「そうかい、ならこれで」

いつの間にか出されていた紅茶に目もくれずにその場から立ち去ろうしたとき、後ろから声がかけられる。

「一つ言い忘れていましたが…… 力加減は覚えておいてくださいね。これはアナタの為でもありますわ…… 右腕が使い物にならなくなる前に」
やつぱ、いけ好かないヤツだわ。

正

入学から二日目の朝。朝食のため学食へ行くと疎らだが何人かの生徒達が思い思いで食べている。自分も何にするか皿を手に料理を選ぶ。

昊陵学園の学食は肉がメインのA定食、魚がメインのB定食、和洋の五十種類から好きな物を選ぶビュッフェスタイルの三種類から選択する形式だ。

大半の生徒がビュッフェを選んでいたので自分も真似てそうしたが……如何せん、種類が多くてどれにすればいいのか分からない。

別に好きな物を食べればいいと思うかもしれないが、こつちはこんな贅沢な食事は初めてな上に味や胃が受け入れてくれるかどうか心配になる。特に酢豚など食つたら吐きそうな気がする。

「…… B定食にするか」

ちゃんと栄養バランスが考えられている組み合わせが今はいいだろう。おばちゃん

にB定食を頼み待っていると何人かの視線を感じる。何か話しているようにも見えるが大方自分が理事長と関わりがあるので話題になつてているのであろう。

中には話しかけようとしているような雰囲気を感じる。まさか、自分に取り入ろうとしているのか……？　いや、そんな、馬鹿な。自意識過剰かよ。まあ、そんな狙いで話し掛けられてもいざというときはどうすることもできないけどな。

そんな事を考えているうちに定食が出来上がり朝から食欲をそそる匂いがダイレクトで鼻に入つて来る。適当に空いている席に座つてちゃんと手を合わせる。言葉ではいわないが心の中ではちゃんと「いただきます」を言った。

……分かり切つていたがやはり美味い。生まれて初めてこんな優しい料理を食べた。食材に一つ一つに旨味が胃の中……いや、全身に染み渡るような錯覚を覚える。箸が止まらず魚を食べてはごはんをかき込み、味噌汁で口の中を洗い流す。

「……ゴクッ、お、おばちゃんB定食！」

「わ、私もB定食！」

その日、いつもよりB定食が多く選ばれたのは学園の七不思議の一つとされた。その原因を作つた張本人は自分とは知らずに料理を味わつていた。

ガタつと隣で音がたつたので横を見て見ると委員長が主人公の前に座つた。いや、委員長では無いのだが名前が思い出せない。確かに重要な登場人物だつたはずだが……

はて、どんな名前だつたか。まつ、いつか。

残り少ないごはんを惜しむように食べていると、隣の席には新たな女子が増えている。

……月見先生も中々ではあるが、あの子も引けを取らないぐらいデカいな。勘ぐつてしまふのは男子特有の物だから許してほしい。メインの魚もごはんも食べてしまつたので、最後の締めの味噌汁をゆっくりと飲む。

これがまたいいのだ。落ち着きながら飲みつつも、隣の男子一と女子三人というハーレム状態の会話が気になるのは必然。さらに、それが一緒の部屋で同居している二人組なら尚更。

「昨晚も、トルは先に眠つてしまつた私を優しく抱いてくれましたから」

「「ぶーっ!?」」

「ゴホッ!?」

味噌汁吹いた×3。巨乳の女子は牛乳を吹いていた。

自分の場合は吹いたというよりかは咳込んだが、口から味噌汁が出たのでそう変わりはないだろう。隣では委員長が激昂して怒声の叱咤が飛ばし、巨乳の女子と一緒に食堂を出ていってしまった。

うん、何と羨まし——んんつ、何と妬ましい奴なのか……ん？ 意味変わつてねえ

な。まあいい。とにかく、けしからん奴だ。初日に寝込みを襲うなど。

「つ、九十九！　ち、違うからなつ!?　誤解なんだ」

あ、やっぱ気づいていたか、俺が聞いていたことを。しかし、だ。主人公のお前が言い訳などすると見苦しいぞ。弁解をしようとすると主人公を手を出して止め、食器を乗せたトレイを持って立ち上がる。

「何、気にすんな。据え膳食わぬは男の恥つていうしな」

「くくつ!?　誤解なんだアアアア!!」

意外とイラつきはしないもんだな、こうなんか父性みたいなもんが湧き上がるというか、同じ男としてどこまで侍らせられるのか気になる所ではある。止まるんじやねえぞ、主人公。

「さあさ、それじゃあ記念すべき最初の授業をはつじめるよー♪」

朝からハイテンションの月見先生が両手を広げて授業開始の宣言をする。しかし、前では委員長がじつ、と主人公を見ており、主人公は時たまこちらを見て来る。次は委員長か……二日目にして一人目か。手を出すの早くない?

「——というわけで、『黎明の星紋』による身体能力超化は、掛け算みたいなものだから、訓練で身体を鍛えれば鍛えるほど効果が高まるんだよー☆　ここまでオッケー?」

ここら辺は朔夜理事長、直々に説明というか解説をされたので分かつていてるが原理まで理解できなかつた。途中から専門用語が多すぎて何を指してるので分からんし、英語で言われても無理だし。最後の方なんてもうアナタのおじいさんスゴイね～って感じだつたわ。

「で、『黎明の星紋』は『位階』^{レベル} つて呼ばれるランク付けがされているのよね。みんなは昇華したばかりだから『I』^{レベル1} つてわけ。これは学期末毎に『昇華の儀』つてのをやつてランクアップさせて行くの。『位階』^{レベル} がそのまま成績になるから、一年間まつたくランクが上がらないと見込み無しとして除籍処分——つまり退学になつちやうので日ごろから心身とも鍛えるんだぞつ☆」

先生の話だとランクアップしない事には進級出来ないどころか退学になるということか……俺の場合どうなんの？『黎明に星紋』なんて打たれてねえぞ。

いや、そのまま退学とかになつたらいいけどさ……朝の話からしたらエスカレーター式に上がつていくんだろうなあ。寧ろ、上がらない奴に喧嘩とか売つて上げさせるとか言わないよな……？ 後で聞こうと思う。

午前の座学が終わり昼飯を食べた後。

『無手摸擬戦』^{ファーストフラクティス} という無手で組手をする戦闘訓練を武道場ですることになり体操服に着

替えて集合した。

自分にとつてはお逃えむきな授業ではあるのだが……まさかのブルマである。今亡き文化の一つをこんな所で見るのは……不肖のこの身、感動しました。

いやいや、違う。そこもだが突出すべき点は真ん中で委員長が土下座している点だ。どうやら食堂での誤解の事を謝っているらしい。ああ、昼飯の時ひたすら説明されたから誤解はしていない。でも結局抱いたことには変わりないよな?

「本当にすまないッ!!」

「誤解が解けたならそれでいいから、土下座は辞めてくれっ!?」

まあ、そうだろう。中には「サイテー」という声も聞こえて来る。主に女子からの。「これは私の気持ちだ! 勘違いとはいえ、キミに対しても失礼な態度を取った自分自身を戒める気持ちを表しているのだ!!」

「表さなくていいから立ってくれ!! 今度は違う誤解を受けそうだ

「え?」

周りを見て状況が理解出来た委員長は先ほどより更に頭を下げた。

「か、重ね重ね申し訳ない!! 本つつ本当に申し訳ない!!」

「だからそれを止めてくれって!?」

「そ、そうだつた」

委員長が立ち上ろうとした時だつた。委員長の足が滑つてそのまま主人公の股間に顔からダイブしたのだ。

「ブフッ!?」

これは笑つてしまふ。中々無いラツキースケベだな。そこの男子よ羨ましがる気持ちは分からんでもないぞ。だが、そこからは予想してなかつた。まさか続きがあつたのだ。

ビッククリした委員長がそのまま立ち上ろうと、主人公の足が腕に引っかかつたまま動き、それによつて二人とも縛れて、主人公は足先が顔の方に、委員長はでんぐり返しの要領で一回転して股間が主人公に顔の部分に。何とも奇跡のような状態でこの短時間にラツキースケベを二回も引き起こす主人公に脱帽の念を抱かせざる負えない。

「す、すまない！ ワザとじやないんだ!?」

「なら早く退いてくれ！」

狙つてやれるもんじやない高等技術だ。そして、そこにすかさず銀髪美少女が夫の浮氣を目撃するかのようなタイミングで登場した。修羅場になるのか、と期待したが……。

「……！ 寝技の練習ですか？」

「違うっ!?」

はつはー、これは予想の斜めを上を行きやがる。天然もしくは純情過ぎるつてことか。いいね、いいね。おじさん見てて楽しいよ。

「……何故、貴様は拳を握りしめている」

「……気にすんな」

隣にいたちつこい眼鏡の男子の言葉で気が付いた拳を緩める。まさか、無意識にイラついていたかも知れない事実に自分自身ビックリする。

やはり、この身体はだいぶ煽り耐性が弱いようだ。よし、殴ろう。ちょうど組手だし怪我しても問題ないだろう。

「なあ、ちょっとやり合わねえか?」

尻餅を突いた主人公に手を差し出す。主人公は少し考えた末に差し出した手を掴んだ。

フツフツフ、昨日見たボクシングアニメの動きを見て覚えた技を見せてやる。
「……分かつた」

どういう狙いかは知らないが九十九が声を掛けて来たときは少し驚いた。九十九は

その見た目から怖がられている。しかし、意外ととつつきやすい性格だというのが今日話してみて分かつた。多少、気は荒いが悪いヤツというわけでは無い。寧ろ、話してて知的な部分も垣間見た。

入学してからただ者じやないと思つていたが、こう相対して見て分かる。これでも武術をしていた身だ。師範……いや、それよりか強いかも知れない。

それに九十九……九十九理事長と何らかの関係があると見て間違いないだろう。

「行くぜ」

「ツ?!

一言、それを聞いた時には既に拳が目の前に迫つていた。風を切つて振るわれる拳を頬の薄皮一枚犠牲にして避ける。次に振るわれる拳は避けきれるわけも無い。故に前に詰めて少しでも威力を弱めて――

「――なつ!?

懐に入ろうとした瞬間に鋭い鞭のような拳が二撃続けて飛んできた。急いで両手でガードして防ぐ。これでは懐に入るどころか近づけない。ガードの隙間から前を見ると右手を引いている姿が見えた。

ヤバイ、大砲が来る!?

更にガードを固めて備えるが、両腕にくるはずの衝撃が一向に来ない。そして、何故

かガードが払われる。

は？ 何が起こつた？

理解することは出来ずに一瞬呆然している所に拳が迫ってきていた。殴られると目を瞑つたが、来たのはデコピンだつた。

「チエックメイドだな」

「……あ、ああ」

九十九は飽きたとでも言わんばかりに後ろを向いて壁際まで歩き腰を下ろした。自

分は何が起きたか訳が分からぬままだ。周囲も驚いたような表情をしていた。

「あれは見事なフェイントだつたな」

「トラ…… フェイントだつて？」

近くで見てくれていたトラが先ほどの攻防、と言うよりかは一方的な攻撃の解説をしてくれた。

「ああ、あの動きはボクシングだな。左のジャブでお前を離してそこから牽制の二回ジャブ。そして、怯んだ隙に右のストレート…… ここまで分かつてたんじゃないか？」

「ああ、その後から訳が分からなくなつた」

右が来ると分かつたから直ぐにガードを固めたのだ。しかし、その後何故かガードを

破られた。あれは一体……。

「右、と見せかけて下からの打ち上げ……つまりアツパーだ」

「……そういうことか」

ガードが払われた、と言うよりかは両腕が上向きに弾かれた感覚だった。しかし、あの一瞬でここまでやれるなんて……プロなのか、と勘織ってしまう。

「うーん、しかし……」

「どうしたんだ、トラ？」

何やらまだ唸つているトラが九十九を見て首を傾げる。

「いや、確かに見事だった。だが、足の動きが滅茶苦茶と言うか、ボクシングをやつていたようには見えなくてな」

「……？」

その後、九十九は誰ともやらずにずっと全員の動きを観察しており、リベンジも断られてしまつた。そして、そのままチャイムが鳴り、九十九の謎が増えた組手の授業だつた。

フォース・ブリット

50 フォース・ブリット

「五日目の午後、いつものように恒例のマラソンなのだが……。
「遅いな……」

黄昏時になつても、穂高がゴールしていなることに對して呴く。それどころかゴールから見える範囲にも穂高の姿は無かつた。

昨日はもつと早く走り終えていたはずだが……。

空の色が変わり始めた頃にゴール。それが昨日のこととて、しかも倒れて氣を失う事も無かつた。たつた、数日ででも目に見えて変化があつたというのに、今日はどうかしたのだろうか。

「みやびのことか？」

俺の呴きを耳にし、橘が聞いてくる。橘は今日も女子のトップで完走し、今はつきつきゴールしたばかりの女子に酸素吸入器を当てていた。

ちなみに男子、そして、全体でのトップは九十九だ。九十九も橘と似たようなことを男子についていた。ただ、酸素吸入器とかではなく紙袋だったが……。

「橘も……つてルームメイトだもんな。気になつて当然か」

「ああ。もしかしたら、みやびはもう……」

その先の言葉は聞かなくともわかる。ここ数日、毎日のように一人、二人と退学^やめているからだ。

入学早々厳しい訓練ばかりだから仕方ないとはいえ、日増しにクラスの人数が減つていくのは寂しく思える。

今しがた橘に介抱されている女子も「もうついていけない……」と弱音を吐いていて、その姿が穂高と被る。

穂高もそう思つてゐるんぢやないかと想像して。

「あア？ 何このぐらいで弱音吐いてんだア？ ただペースを保つて走るだけだろうが。お前は走り方がヘンだからもつと背筋伸ばして腕を振れ。だから遅えんだよ」
 …… アイツの言い方も退学^やめていく要因の一つになつてないといいが。言い方はアレだが九十九は的確なアドバイスをしている。

確かに彼は走り方が可笑しく無駄な体力を使つてゐるためタイムが遅い。中にはちゃんと九十九のアドバイスを聞いてタイムが上がつたヤツもいた。

最初の方は特に何も言つて来なかつたが、退学していく奴等を見て思う所があつたのだろう。それから、橘のように走り終わつた者の手当や先ほどのようなアドバイスをす

るようになった。

ただ、やはり言い方が悪く気持ち的に滅入った人にとってはキツイ物があるのか、泣きそうな表情をしていた。

「九十九！ そんな言い方は無いだろ！」

そして、毎度のこと橘が九十九に突つかかって行く。

「ハツ、まだ優しい方だろ。 同年代には十キロの荷物持つてマラソンしてる奴等だつているんだぜ？」 そいつらは『黎明の星紋』なんてもん無しで訓練してんだ。 それに比べたら全然イージーモードだろうが」

「そういうことを言つてるんじゃない！ 他にも言いようが——」

こうなると、どつちも譲る気が無いので平行線が続く。 いつもなら自分が九十九を宥め、穂高が橘を宥めるのだが肝心の穂高が帰つてきてない状況だ。

「……。 ちょっと様子を見てくる」

それだけ言い残してコースを逆走し始めた。 それを見ていた九十九は後ろ頭をガシガシと搔いて寮のある方へと向いて氣怠そうに歩き始めた。

「……。 後、任せるわ」

「あ、おい！ まだ話は終わつてないぞ、九十九！」

寮生の全員が寝静まつた時間帯に自分は呼び出された。本来ならこの時間にはもう寝ているのでとても眠い。生活リズムが崩れるのは余り好きでは無かつた。

「たく、何だよ。こんな時間によ」

呼び出した本人——朔夜はクスリツと笑う。

「定時報告と通達を少々したいと思いましてのことですわ」

「……今更、定時報告つて言われてもな……で、何が聞きたい？」

「彼らはどうですか？」特に九重透琉は

どう、と言われても返答に困る質問だ。良くて秀才、悪く言えば凡人のちょっと上ぐらいい。突出する所も無ければ才能を持つていても見えない。

第一にまだ五日目だ。事細かいところまで見てないから評価のしようがないのだ。

「まあ、もう自主退学していくヤツはいねえだろな。必死にしがみついてると思うぜ」

質問の答えとは言い難いが、朔夜も分かつていて、というよりかは、そこまで自分の回答に期待していないのだろう。

「そうですか」

朔夜はそう呟くとティーカップを片手に持つて中身を飲む。……

本当にそれだけ

かよ、分かつてはいたけどさ。質問してきたのはそっちだろうに。まあ、今に始まつたことではない。

朔夜がティーカップを置いて少し考えたような素振りをしたのち手を前で組んだ。「明日、『紺双刃^{デュオ}』を決めますわ。とはいへアナタには関係の無いこと。自由にして構いません」

「俺だけ休みつてことか」

「本当の所はアナタがいると邪魔だからです」

「……」

ホント、何で朔夜は自分をここに入れたのか理解出来ない。言わんとすることは解らなくも無いが、言い方というのがあるだろう。

「……ああ、そういうことか。委員長が言つていたこと。これがいじめつ子はいじめられつ子の気持ちが分からないつてヤツか。

大方、自分が朔夜と関わりがあることはアイツ等も気が付いているだろう。まあ、ワザと気が付かせるような節を感じたが。それで自分に取り入る……つまり『紺双刃^{デュオ}』となれば色々と都合が良くなると思うだろう。

それを防ぐため……いや、そんなことするなら隠し通す方が良くないか？ わざわざ、そんなメンドクサイことをするとは思えない。

こちらをじっと見る朔夜の視線を感じて悪寒が走る。ダメだ、理解出来ない。何が目的なのかさっぱりだ。

「ああ、それと。『絆双刃^{デュオ}』が決まつたら直ぐに『新刀戦』と言う催しをします。アナタはその時——」

「——はあ？」

朔夜の言葉に耳を疑つた。

卍

「おつハローー♡ みーんな無事に『絆双刃^{デュオ}』が決まつて良かつたねー うんうんつ☆
さてさて、パートナーが決まつたことで今日から心機一転、席も『絆双刃^{デュオ}』同士の並び
に変更しよつか …… ん？ おやおや？ 仮同居のときとパートナーが変わつて無い人もいるみたいねー？」

「相性がよかつたんです」

「わわつ！ どんな相性？ どんな相性!?」

「性格！ 性格の相性だから！」

「ちえー……」

期待していた答えと違うな主人公。そこはやつぱり…… というかさつきから視線が痛い。そんなに俺を見て楽しいか？

「はいはーい みんなも気になつてるよね？ 実は九十九くんは特例で一人で『絆双刃^{デュオ}』扱いになるの。理由は簡単…… なんだけどまだ秘密事項になるから教えられないよー。みんなも何となく分かつてただろうけどねー。九十九くんも喋つちゃだめだぞつ[♡]」

ウゼエ、なんか胡散臭い先生なんだよなあ。とういうかお前等こつちみんな。喋らねえからな？ そんな見ても喋らねえからな？ 喋つたら朔夜に何されるか分かつたもんじやねえから。

「さてさて、正式に『絆双刃^{デュオ}』が決まつたことだし。近いうちにみんなお待たせの『焰牙^{ブレイズ}』を使つた模擬戦しちゃうからねー☆ その名も『新刃戦^{しんじんせん}』！」

その宣言に教室がざわめく。主に驚きと戸惑いによつて。まあ、模擬戦はあると言われていたがこうも早くあるとは知らなかつただろう。自分もこの前、朔夜に聞かされた

時は驚いたもんだ。主に俺に対する誓約にだが。

「それじゃあ、その内容を説明するけど。自分達以外は全員敵つ！　だよ。日程は来週の土曜日——つまりＧＷの前日ね。誰かが病院送りになつてもいいように休み前にやるつてわけ♪」

「よおーし、一人二人殴つても問題無いということか。まあ、俺が殴るのは主人公テメーだけだ。これからずつと銀髪美少女と同室つてことだろ？　一発ぶん殴つてもいいよね？　え、ダメ？」

「開始は十七時、終了は十九時までの二時間つてことで、時計塔の鐘が合図だからねー。場所は北区画一帯になるよー♪」

なるほど、てことは校舎内もありか。

「みんな『焰牙』^{ブレイズ}には特性があるわけだし、それに合わせて正面から戦うも良し、戦略を練るのも良し、地形を考慮して、いかに自分達が有利に運べる状況で闘うかも重要つてわけ♪」

「へえー、だいぶ実践的な感じだな。そりやあ、こんなことを一年生の頃からしてれば強いはずだ。まあ、俺の時の場合はやつぱり地理が分かつてなかつたからか、逃げればそうそう追いかれることは無かつたな。」

……指定された、北区画つて場所へ少し歩いてみるか。

「それじゃあ、みんな『新刃戦』に向けてガンバろー♪」

その日の昼休み。俺はユリエ、橘、穂高、トラ、タツと共に学食で飯を食っていたのだが——『新刃戦』の話題が出ると、穂高は牛乳の入ったコップを手にしたまま、憂鬱そうにため息を吐いた。

「はあ……まだ『紺双刃^{デュオ}』が決まつたばかりなのに……」

「決まつたばかりだからだと私は思うぞ、みやび」

「俺も橘と同じだな。この時期だからこそ、意味があるんだと思う」

橘と俺の言葉に隣にトラも頷く。

「どういうことなの?」

問われ、橘が自分と同じ考え方の内容をみやびに説明した。

「なるべく早い内から実戦形式の戦闘を経験させておきたいのだろう。確かにこれから授業で『紺双刃^{デュオ}』としての動きや心構えは教わったとしても、それは知識だけしかない。経験として蓄積させることで知識は真に身に付くものだ」「習うより慣れろということだな」

時間帯や範囲の広さ、それにバトルロイヤルというルールからしても不確定要素が多

く、より実践的な状況を作り出している。更に、開始時間が十七時というのもまた考えられている。終了までの三十分間は完全に日が落ちて視界が悪くなる。視界が悪いと戦況へ大きな影響を及ぼすため、それも経験させておくのだろう。

「そつかあ、色々理由があるんだね……あ、つてことはさ。つ、九十九くんってどうなるの？ やっぱり一人でやるのかな？」

この場におらず、食堂にも姿が見当たらない。話によるとパンを片手に何処かに歩いていっただらしい。考えられるのは会場の下見、と言った所か。

「特例……か。他の者は理事長の蟲原だのなんだの言っているが……実力はホンモノだろうな」

「トラもやつぱりそう思うか？」

あの組手以来、手合わせをしていない処かれり以來一度も組手をちゃんとしていい。のらりくらり流すばかりだ。だが、あの時の一回だけで理解出来ている。アレが全然力な訳が無い。他にも日ごろの訓練などを見れば明らかだ。一人だけ実力が違う。

「そもそも、俺はアイツの『焰牙』^{ブレイズ}を見たことが無い」

それだ。トラの言う通りこの場、いや、今のところ誰一人、九十九の『焰牙』^{ブレイズ}を見たことが無いのだ。

今まで『焰牙』^{ブレイズ}を扱う授業が無いわけではないのだが、それは別に出しても出さなく

ても良いものだつたため、九十九は出していない。

『焰牙』『ブレイズ』は切り札だ。それを無しにしても高い実力を持つている。もしかしたらそれを考慮して特例なのかも知れない。

「まあ、それも今回で分かるだろう。アイツも流石に『焰牙』を使わざるを得ないはずだ。それに、今日の放課後から『焰牙』^{ブレイズ}を使えるようになるから、何処かで必ず出すだろう」おそらく、いや、ほぼ確実にクラスメイト全員が、今日に放課後から『焰牙』^{ブレイズ}の訓練を始めるだろう。

ここで重要なのは、他の『紺双刃』^{デュオ}の訓練を無許可で見学しても構わないとも伝えられている。つまり、スパイ行為を学校側が容認しているのだ。

たとえ、同じ種類の武器でも使い手によって大きく変わる。戦闘スタイルは人それぞれ、千差万別となる。

言つて仕舞えばもう既に情報戦という観点から見れば、現時点で『新刃戦』は始まつてていると言つても過言では無い。

「まつたく、厄介な話だな……」

「ふんっ、顔はそうは言つてないぞ、透琉」

「お互い様だろ」

強い相手と手合わせすることに楽しみを覚える。単純な性格だとは思うが、性格なの

だから仕方ない。

「こ、九重くんもトラくんも、凄いやる気いつぱいだね……。やつぱりあの賞与があるからなの……？」

『新刃戦』で優秀な成績を収めた『紺双刃^{デュオ}』には、特別賞与という名目で学年末を待たず、昇華の機会を与えられるとのことだった。

必ずしも一度で『位階昇華^{レベルアップ}』出来るとは限らない以上、『昇華の儀』は少しでも多く受けられる方がいい。

しかし。

「賞与があるからってわけじゃないんだけどな。もちろん、それも理由の一つだつてことも否定はしないけど」と、穂高に返しつつ、トラに視線を送る。

「ふんつ。貴様と本気で闘^やるのは一年半ぶりだな」「ああ、そうだな。俺と当たる前に敗退するなよ?」

「それは僕のセリフだ」

不敵な笑みを向け合い、軽く拳をぶつけ合う。

「え、えっと……」

「ふふっ、みやびには少々わかり辛い関係かもしれないな。だが、この二人に負けないよ

う私たちも頑張ろうではないか、みやび

「う、うん……。でも、私じゃ足手まといに……」

「大丈夫だ。確かに現時点でもみやびの技量や能力はこの二人に劣る。それならば劣っている力量を埋めるための策を立てればいい。何より私というパートナーがいることを忘れないでくれ。これは一対一ではなく『紺双刃^{デュオ}』による勝負なのだ……例外もあるが」

九十九カズヤという謎の多い人物。不安が積もりつつも高揚感が高まっていくのを感じた。

——『新刃戦』の幕が上るのは近い。

ファイフス・ブリット

夕方近くの時間帯。クジで指定された場所で待機しているとピリピリと張り詰めたような空気が漂つてくる。これから始まるイベントに対し、全員が高揚感を抑えられないのであろう。

「…………そろそろか」

リーンゴーン…………リーンゴーン…………リーンゴーン…………。

時計塔の鐘^{ほのおり}が『新刃戦』の開始を学園中に宣言する。それを合図に各所で『力ある言葉』が響き、焰^{ほのお}が舞い上がる。

「はあ、興冷めだよなア…………」

もし朔夜にあんな誓約をされなければ今ごろ自分は喜んで敵がいる方に突っ込んでいただろう。正直、守る意味は無いが…………釘を刺されてしまつた以上、何故か破る気になれない。自分でも下手に律儀というか義理堅いというか…………義理はないか。

「まあ、縛りプレイってやつも嫌いじやねえ…………いいぜ、やってやるよ。『焰牙』を使わないでやつてやろうじやねえか――」

指定された場所から喧騒がする方へ走つて向かう。少し先で、もう既に二組の

『絆双刃』^{デュオ}が戦闘を始めていた。その一人がこちらに気づき驚きの声を上げる。

「ツ！ 九十九！？」

「なつ、本当に一人なのか!?」

拳を握り締め、真っ只中に走り込む。ニヤリ、と口元を歪ませれば見た目通りの兇悪な姿を見せる。

「——喧嘩だアアアアアアアツ!!」

正

「ま、まじ…… かよ」

「ふう…… 最後の一撃はいい線言つてたぜ」

それを聞いたかどうか知らないが、右拳を鳩尾に叩き込まれ氣を失う男子生徒。

『新

刃戦』が始まつてから大体一時間ぐらい経つており外もだいぶ薄暗くなつてきてる。これまで大体、五組ぐらいの『紺双刃^{デュオ}』を倒したが、このイベントも終盤戦に入つて来ている。生き残つてるのはもう片手で数えられるほどだろう。

「さてと、残りは校舎の中か？」面倒だな、ここから結構遠いじゃねえか

そうボヤいていると近くから人の気配を感じて、咄嗟に構えを取れば現れたのは眼鏡野郎だつた。

「んだよ、テメーかよ」

「……何故、構えを解かない？」

眼鏡、三國を含め月見先生等は怪我をした生徒たちの為に見回りをしている。勿論、本来なら構えを解くべきなのではあるが身体は言う事を聞きそうにない。どうやらあの時、負けたことが未だに忘れられないようだ。

自分でもここまで悔しいと思つたことはない。確かにあの時は消耗もしていたし、体調も良くなかった。更に言えばシエルブリットも使いこなせていなかつた。だが、戦いにそんなの関係無い。勝てば官軍負ければ賊軍と言う言葉通り、自分は負けて辛酸を舐めさせられたのだ。目の前の男に。

「へつ、ちようどいいじやねえか。この場所なら思い切つてやり合えるだろ?」「……」

三國は何も言わない。ただ、こちらを見据えるだけだ。

「気に入らねえ…… その目だ。俺を見下してやがるその目。見ると腹が立つ」
「…… フツ、私は別に構わないが…… あつちだ」

「あア？」

三國は校舎の方を指差す。

「あつちにお前と戦うこと楽しみにしているヤツがいる。そつちを先に済ませるとい
い」

「俺とやり合いたいヤツがいるだと? コイツ何を考えている。ただのでまかせ
か…… それとも本当にいるのか。」

「…… チツ、これも朔夜の考え方か? マジで分かんねえ、俺を使って何がしてえんだ」
『焰牙』^{ブレイズ}を使わずに生き残れどか、生徒たちの動向を観察しろどか。朔夜は俺に何
を求めてんだ? 何となくやろうとしていることは解る。だが、理解出来るかと言われ
たら話は別だ。

目的どころか過程が分からぬ。考えが分からぬ。まあ、俺みたいな凡人が理解出
来たらここまで成し得てないか。

「はいはい、行けばいいんだろ…… いつかぜつてえ、リベンジしてやつからな」

三國は何も言わずカズヤを見送った。

「お疲れ、ユリエ」

「ヤー。トールこそお疲れさまでした」

小さく笑みを浮かべるユリエへ透流は笑みを返しつつも胸中では先ほどの橘達の戦いで見せた判断力に舌を卷いていた。

橘が使う『焰牙』は中遠距離を主体とする『鉄鎖』で自分と相性が悪いのは明白だ。それを判断してそれぞれに見合った相手を見極めるユリエ。

だが、それと同時に背中を任せてくれたことに対する嬉しさもあつた。
「さて、と。それじゃあ俺達は行くから、後は任せていいいな？」

「う、うん」

ユリエの一撃で橘は意識を失い、今はみやびが介抱している。怪我は無いようだが、それ故に『焰牙』^{ブレイズ}が人を傷つけないという特性に改めて驚きを禁じ得ない。

時間からすると、あと一戦が闇の山だろう。出来れば九十九かトラとやりたいところだが――

「——ぐつ…… があああああああああつつつ!!」

上階より響いてきた、トラの絶叫によつて思考が中断される。

「トール。今の声は…… !!」

「みやび、ここにいてくれ！ 橋を頼む！」

「う、うん！ と、透流くんたちは…… !?」

「行きましょう、トール」

ユリエに視線を向けると、意図を察して領きが返つてくる。

「ああ、行こうユリエ！」

「き、気を付けてね、透流くん、ユリエちゃん！」

みやびの声を背中に受けて、俺たちは声の聞こえて来た上階へ駆け上がる。いやな胸騒ぎが止まらない。あの日と同じだ。

道場が炎に包まれたあの日と同じく、言葉には出来ない嫌な予感が胸の奥で渦巻く。

最上階の廊下へ到着すると、中央に佇む影、特徴的なうさぎ耳のシルエット。その影の視線の先、壁際に倒れ込んだ友人の名を叫ぶ。

「トラ、タツ…… ツ!!」

「九重くん……！」

俺の叫び声に月見先生が、驚きに満ちた顔を向ける。

「月見先生！ いつたい、何があつたんですか!?」

「せ、先生も今來たばかりだから……」

「トール。トラたちの傷が酷いです」

見たところ二人とも鋭利な刃物で切り裂かれたような傷が数ヶ所にあり、大きな傷を負っている。その時、微かに息のあるトラが何か呟いた。

「うつ…………うしろ…………だ、透流…………!!」

「え?」

振り返れば、笑みを浮かべた月見先生が見下ろし——いつの間にかその手には、凶悪なシルエットの『牙劍^{デブテヅュ}』が握られていた。

「ツ!?

振り抜かれたソレを紙一重で避けた。

「フユ一、惜つしい☆ もう少しで先生の『焰牙^{ブレイズ}』で九重くんを真つ二つに出来たのにー

♪

「月見、先生…………どうして…………ツ!」

いつもの口調で恐ろしいことを言う月見先生に驚きつつも問いかける。

「どうしてって…………アタシがコイツ等をやつたからに決まつてんだろうがツ！」

口調が変わり獰猛な笑みを見せる月見先生。そのまま振り抜かれる『牙劍^{デブテヅュ}』を咄嗟に

避ける。

「月見先生！ 何故だ!? どうしてこんなことを!! ……うつ!?

痛みを感じて患部を抑えると手にはべつとりと血が付いていた。

「そんなどうして!? 『焰牙』は人を……ツ!?

「ハツ、壁も地面も壊せる武器が人間だけを傷つけない……なんて、そんな都合のいい話があるわけねえだろ」

月見先生は『牙劍』を振りぬき構える。

『焰牙』は魂を具現化した力。心の持ち方一つでいくらでも変わるってことだ—— よオツ!!

いつの間にか距離を詰められ振りかぶられた『牙劍』をユリエが咄嗟に前に入り防ぐ。

「良い反応するじゃねえか、銀髪」

「殺意を持つて『焰牙』を扱えば人を傷つけることが出来るということですか……！」

「飲み込みがはえーな、銀髪」
「うおおおつ!!」

「レクチャ―その一。実は『焰牙』は人を殺せちやうんだよね♪ でもこれって機密事項
鍔迫り合っている間に月見先生に奇襲をかけるが蹴りを食らわせられ、ユリエも弾かれてしまふ。

「レクチャ―その一。実は『焰牙』は人を殺せちやうんだよね♪ でもこれって機密事項

だから内緒だよ♡」

いつもの口調で言われる事実に衝撃を受ける。

「続いてレクチャーその二。『焰牙』を破壊されるとどうなるかつて言うと――」

トラの『焰牙』である『印短刀』を真つ二つに叩き斬った。

「ぐつ、あああああああああああああつっつ!!」

直後、トラが絶叫し力無く床へと倒れ込んだ。

「この通り、丸一日起きられねえぐらいのダメージを精神にくらう。まあ、仮にも『魂』を破壊されてその程度で済むんだからマシかもな」

「どうしてこんなことをする！」

「仕事だ、仕事。有望そうな新人を始末するだけの簡単なお仕事さ。さて、そろそろお喋りを終わりにして殺してやるよ。前菜には丁度いい」

くくくつ、と笑い声を上げ月見先生——いや、月見の放つ殺気が膨れ上がっていく。

「さあ始めるぜ!! 一分一秒でも長く抗つてアタシを愉しませてみろおつ!!」

—
2.
!?

その姿が搔き消え、俺は目を疑う。

上です！」

「なつ!?

ユリエの声に視線を上げたまさにその瞬間、月見は天井を蹴っていた。

「トール!!」

ユリエが受け流し守ってくれる。しかし、月見が横薙ぎの二撃目を放ちその力に押され吹き飛んでしまう。

「くつ、おおつ!!」

格闘で挑むが拳は全て避けられ掠りもしない。

「オラオラッ！ もつと必死にやらねえと死んじまうぞ!!」

「がつ!?」

月見の膝蹴りが胸部に深々と刺さりミシミシと不吉な音をたてる。

「たくつ、このぐらいでへばつてんじやねえよ！」

月見がそのまま頭を鷺掴みにし投げ捨てられる。そして、『牙^{デブテジュ}劍^{ケン}』が振り抜かれようとしたとき、ユリエが壁を蹴つて高速で月見の背後から奇襲を仕掛けた。

「おつと！」

しかし、気づかれ振り向きざまの横薙ぎ一撃でまた壁際まで吹き飛ばされた。その隙を見逃す月見ではない。すぐさま、『牙劍^{デブテジュ}』を振り上げた。

「これで終わりだア!!」

ガキイイン！ と金属音とともに左腕の『盾^{シールド}』に掛かる重圧が重く圧し掛かってくる。

何とか間一髪で二人の間に割り込むことができた。

「ユリエツ！ 大丈夫か!?」

「他人の心配をしてるヒマがあんのかア!?」

ゆっくりと押し込まれて行くのが分かる。

「ぐつ、ううつ!!」

「頑張るねエ、だが、無駄だ！ 弱エヤツは死んどけ!!」

「ツ!?」

『弱いから死んだだけだよ』

あの日に惨状が脳裏に浮かぶ。

「こつつのお!! 雷神のミヨルニール一撃!!」

押し返しつつ、弓を放つかのように拳を引き絞り、怒りに任せて一撃を放つ。——が、

それは空を切り、背後の壁を破壊した。

「くはっ、その『位階』でとんでもねー威力だな。……まあ、当たらなくちやー意味がねーけどよ」

くははっ、と余裕を残して笑う月見。二人とも力で押し負け、速さでも負けている。

あの時の訓練では力に片鱗も見せてなかつたのか。もう、勝ち目が無い——。

「——『位階^{レベル}』……か。気に食わねえな、勝手にランク付けしやがつて」

「九十九つ!?」

後ろから聞こえて来たその言葉に振り返ればこちらに歩いて来る九十九の姿があつた。しかし、その表情は今まで見たことの無い、闘志のような熱いナニカが迸つてゐる。

「クククツ……ハツーハハハハツ!! 待つてたぜ！ 九十九！」

月見は高笑いしたのち、先ほどとは比べ物にならないほど殺氣を高めていく。
「九十九、何で……いやつ、気を付ける！ ソイツは危険すぎる！」

しかし、九十九は歩みを止めず月見の間合いまで近いてしまつた。まさか、まだ本性に気が付いてないのか？

「アイツ等のことはどうでもいいけどよ……やつぱ同期として仇討ちはしないと
なあ。まつ、死んでねえけどよ」

「仇討ち……？」

どういうことだ？ 何故、九十九が月見の同期の仇になる？ 理解出来ないまま進んでいく。自分たちの正面に立つてから黙つていた九十九がゆつくりと右手を前へ突き

出した。

「……この場合は例外つてことだよなあ？」

「あア？ 何のことだ？」

言葉に意図が分からず月見が言葉を聞き返す。ニヤリ、と九十九が口元を緩めれば人差し指を曲げて中指を曲げ、順に曲げていき最後に小指を曲げて拳を作る。

「これなら使つてもいいよなア！」

右手の黒い指無しグローブから軋むような音が鳴るほど強く握り込んだ。

「——『焰牙』ツツ!!!」

シックス・ブリット

「——『焰牙』ツツ!!」

九十九が『力ある言葉』を口にした瞬間、廊下全体を覆うほど強い光——いや、焰が九十九を中心に広がる。ユリ工を守るように前に出て自身の『盾』で防ぐ。

「こ、これが九十九の……ツ?!」

焰が次第に九十九の右腕に向かつて収束されていく。焰は右腕を覆う装甲となり、背中には赤い羽根が生える。

九十九が腕を払うと残滓の焰は空気に溶けるように消えていった。

右腕を覆う朱色と金色の混じつた装甲が月明りに照らされて美しく光る。それは本来あり得ないとされた——自分と同じ『異能』の『焰牙』だつた。

「くはつ——ハツハツハハツツツ!! まさか『異能』が二人もいるとはなツ! しかも『盾』とはまた打つて変わった『焰牙』だなア、オイ!」

傑作だと言わんばかりに月見は笑う。腹を抱えて笑うほどだ。ある意味チャンスなのだが九十九は動かず、右腕の調子を確認していた。

「久しぶりだからな……若干、重く感じるぜ。まつ、んなこたア、どうだつていいん

だ。喧嘩だ、喧嘩。喧嘩しようぜ！」

「喧嘩だア？ くはつ、笑わせるじやねえか。いいぜ、ノつてやるよ。その殺し合いに——なツ!!」

自分の時より素早い踏み込みで斬りかかって行つた月見に対して九十九は反応できずに止まつてゐる。やはり『位階』の差があり過ぎる……!!

しかし、ニヤリと口元を歪めたのは九十九だつた。

「あア、そうこなくちゃなアツ!!」

月見の上から振り抜かれた袈裟斬りを右手で受け止め火花が散る。驚きの表情をしている月見を見てあの一撃は本気だつたと確信する。九十九が右腕を振り上げ月見の『牙劍』^{デブテヅユ}を上にはじき返す。

その時、出来た隙を付いて九十九は右腕を引き脇を締めた。

「オラッ——ツ!!」

下から抉るように突き出される鋭い一撃を避けれないと判断した月見は咄嗟に『牙劍』^{デブテヅユ}で自身の身体を守るように体の隙間に割り込ませる。

金属同士がぶつかり合う音と共に弾かれ合う二人。突っ込んで来たときまで月見は笑つていたが、もう真剣な表情へと変わつていた。

腕が痺れてやがる、と『牙劍』を持つ手を見ながら思う月見。たつた一発殴つただけ

でこれ程の威力。これ以上『焰牙』^{ブレイズ}で受けるのは止した方がいいだろう。下手にやると『焰牙』^{ブレイズ}がもたない。

「殴つただけでコレ、か……お前、本当に『I』^{レベル1}か？」

「ケツ、さつき言つたろうが。そういうのは気に入らねえってな」

ギチギチと九十九の拳が鳴る。

「速さも力もワタシと同じ……いや、力だけなら上か？　流石、理事長のお気に入りつてどこか。『位階』^{レベル}の制限無しつてか？」

その月見の言葉に九十九は後ろ頭をガシガシと搔く。ほんの前まで先生という立場だつたが今は敵だ。その敵の目の前でその行動は隙を見せすぎなのではないだろうか。しかし、月見は武器を構えただけだった。

「別に朔夜……理事長には、まあ、恩つうか……なんかあんけどよ。別に聾廻されてるわけじやねえ。それに、俺は『黎明の星紋』^{ルキフル}を打たれてねえし」

「なっ！」

「っ！」

その発言に自分とユリエは驚きの声を上げる。月見も言葉には出さないものの何とも言えない表情をしている。

「俺には適正が無いとか言つてたしな……つと、これ機密だつたわ。まつ、どうせ直

ぐ分かる事案だつたろうけどよ』

『黎明の星紋』無しで超人的な身体能力と『焰牙』を持つことはあり得るのだろうか。しかし、あり得ないとは九十九を見て言えない。『黎明の星紋』での超化は遺伝子操作によるものだ。つまり九十九は元々『黎明の星紋』のような物を持ってたいとういことだろう。

これなら納得が出来ないこともない。特例の件や自分以外の『異能』の『焰牙』。これまで強いことも。

「んなアことよりもさつきの続きを行こうぜッ！」

「チツ！」

鋭い踏み込みと共に放たれるアッパークットを月見は冷や汗を垂らすと同時に避ける。九十九の一撃は一発一発がとても重いことは先ほど『牙劍』でガードした時に分かつている。生身で受けければひとたまりも無いだろう。

つまり、もう避けるしかない。しかし、やられるだけの月見ではない。

素早く避けた後にカウンター気味の横払いをした。難なく右手で受け止める九十九だつたが、その隙に月見の蹴りを身体の真正面に受け、少し仰け反る。その隙に一步距離を取つて油断なく構える。懷に入れたら不味い。しかし、相手はあの右手が届く範囲だ。リーチの点に置いてはこちらの方が有利。

このまま距離を保つて少しづつ九十九^{ヤツ}の『焰牙』^{ブレイズ}を削り取る……！

今までとは打って変わつて純粹な殺意が月見からヒシヒシと感じて来る。こちらの足が竦んでしまう程の圧力に九十九はニヤリ、と笑つた。

「いいねエ……こつちもアツくなつて来るじやねエか！」

右腕を引き左手で狙いを澄ますように相手を被せる。音が鳴る、ギチギチと拳が固められて行く音だ。

「一発目でくたばんなよッ！ 衝撃の一——」

パキパキ、とガラスが割れるような音と共に右腕の肩甲骨に伸びていた赤い三本の羽根の一本が砕け散ると、そこから勢い良く空気のような物が噴射された。それが推進剤となつて唯一のアドバンテージである距離を詰めてきた。更に威力も高めた一撃だった。

一瞬にして詰められた距離。油断無く構えて、一拳手一投足に見逃さないようにしていたはずなのに。強く唇を噛み締める。出し惜しみしてやられるのは愚の骨頂だ。

自分の『焰牙』^{ブレイズ}の——『蛇腹劍』^{スネイク}の真の力を……ッ！

「ツツ！！『狂蛇』——

——『牙劍』^{デブティショウ}を前に掲げた時だつた。まだ猶予があつたはずの距離が更に詰められている。ぐらり、と視界が揺れるような感覚が目の前を覆う。

まさか、さつきのアツ・パー・カツトでつ!?

顎を掠れただけで軽い脳震盪を起こすことがある。その殆どがアツ・パーなどの顎を掠める一撃が要因だ。しかし、平衡感覚がズレたままでも真の力を開放しようとするが間に合うはずが無く。

「——ファースト・ブリットオオオツ!!」

それは、自分から見ても恐ろしいと思える強烈な一撃だつた。

「ぐつ、アアアアアアアアツ!!」

その一撃は月見の『焰牙』^{ブレイズ}を破壊するには十分なほど威力を持つており、そのまま『焰牙』^{ブレイズ}を突き破つて肉体へも拳が届く程の一撃。

自分の雷神の一撃の何倍——いや、何十倍もの威力があることを感じとる。

あれが、九十九の『焰牙』^{ブレイズ}ツ!!

自分と同じ『異能』^{イレギュラー}で『盾』^{シールド}とは真逆の攻撃に特化した『焰牙』^{ブレイズ}……ツ!!。

「惜しかつたな、後もう少し早ければどうなつてたか……ああ、そういえば『焰牙』^{ブレイズ}つて破壊されたら一日ぐらいは起きないんだつけ?」

自分達が手も足も出なかつた相手に対して九十九は真正面から圧倒的な力で叩きの

めして見せた。しかも、まだまだ余裕があるようにも見える。少なくとも月見は学園から抜擢されて学校の教師になつた程の実力者だ。

それをたつたの一撃で、しかもあれが羽根一本消費して放つ技としても残り二本残つてゐる。あの威力の物が後二回も放たれるなんて……ゾツとする。

「取り敢えず、一件落着かア？ ハア、不完全燃焼だな。こりやあ」

落胆した様子を見せてこちらに向き直り歩いて来る。ユリエと自分は思わず身構える。先ほど溢した不完全燃焼という言葉。それに、月見の件があつたがまだ『新刃戦』は終わつてない。

「トール

「ああ…… 分かつていてる」

勝てる見込みはゼロにも等しいだろう。しかし、黙つてやられるほど自分達は落ちぶれてはいない。負けられない、負けてなるものか。

しかし、近づいて来る九十九は気まずそうな表情と共に『焰牙ブレイズ』を消して、後ろ頭を搔いた。

「あーっとな…… やる気だしてるとこワリインんだけどよ。ソイツ等、どうにかしねえとヤベエぞ」

指を指されはつとなる。そうだ、トラとタツが深手を負つたままだつた。

「ツ！　あ、ああ！　急いで救護室に運ばないと」

「んじや、俺はコツチを持ってやるよ」

九十九はタツを持ち上げ肩に担ぎ上げるとスタスタと救護室の方へと歩いて行く。まるで先ほどの戦いが無かつたかのように九十九からは気力を感じない。

その時、『新刃戦』の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

「おつ、ちょうど『新刃戦』も終わつたみたいだな」

歩きながら窓の外を見る九十九を追いかけるなか、微かに九十九の右腕が震えているよう見えた。

卍

「——以上が『新刃戦』の記録です」

九十九の一撃によつて『焰牙』^{ブレイズ}を碎かれ、

月見璃兎^{つきみりと}が倒れ伏したところで男——三國

は映像を停止する。

「くはつ。わざわざ動画を見せてまで皮肉らなくても、結果報告だけでいいだろーが」「百？は一見にしかず、というものです。何より君の報告は大雑把過ぎですかね」

「へいへい。わるーございましたつと」

まつたく悪びれもせぬうさぎ耳を揺らす月見、それにため息混じりに首を振る三國。「しかし、本気で殺しにかかるとは……もしも、のことがあつたらどうするつもりだつたんですか？」

「……構いませんわ。私が現場の判断にお任せすると言つたのですから」

ここで初めて口を開いた主へと、三國と月見は視線を向ける。その先に座っているのは漆黒のドレスに身を纏つた少女——こうりょうがくえん吳陵学園理事長、九十九朔夜シードだつた。

「過酷な環境で芽吹く種子こそ、美しき花を咲かせると私は考えていますわ……彼のようだね」

今度は扉の近くでの壁に背を付いて立つっていた九十九カズヤに向けられた。

「……なら、アイツ等を俺が住んでた所にぶち込んでやればいいんじゃね？」

社会見

学と称して

「くはつ、そりやあいい」

「貴方たちは本当に……はあ」

三國は二人に頭を抱えざる負えない。それを見ていた朔夜はクスリ、と笑つた。

「しかし、なぜ彼を彼女の所へ行かせたのですか？　彼が行けば戦うのは当然、それに他の生徒達の成長の妨げになつたのでは？」

三國の言つてることは最もだ。月見が戦いたいと言つていたのは知つているが、それを尊重したとは思えない。

あの場で殺しかけたとは言え、九重透流とユリエ・シグトウーナの戦いはまだ終わつて無かつた。あのまま行けばもしかしたら……と思つてしまふ。

「一つはカズヤの力を見させるため。彼らには大いに刺激になつたでしよう。二つ目はもう一度、カズヤの力を確かめて置きたかったからですわ……最も、それは『シエルブリット』を除いた戦闘能力ですが」

珍しい朔夜の不機嫌な微表情とジト目にカズヤは苦い顔をする。

「ああ、ああ、悪かつたつて。ごめんなさい、わりい、すまねえ、許せ」

全然、反省の色が見えない。しかし、あの状況でカズヤが『シエルブリット』使うと予想していたはずなのに、敢えて向かわせたのは朔夜にしか分からぬことだった。

「しかし、『異能』^{イレギュラー}が一人もいるとは驚きだぜ。聞いてねえよつてな」

皮肉めいた笑みを浮かべつつ、月見は足を投げ出すようにソファに座つた。

「随分と上機嫌ではないですか。もしや彼のことお気に召しましたか？」

「くはつ、バカ言つてんじやねーよ。気になるのは九重アツチの方だ。こつちは強すぎてやりようがねえ……まあ、お気に入りつて言うんならアタシよりアンタの方だよな、お嬢様」

その言葉は、入学式の日にわざわざ透流に顔を合わせたことを指していた。

「ふふ、『彼』に縁のある者なのだから気にかけて当然ですわ」

「あいつ、か」

朔夜の一言に、三國、月見ともども僅かに眉をひそめる。カズヤは逆に口角を上げた。
「…………さて、これでアタシの仕事は終わつたわけだが——これからどーすりやいい？」

「ご自由に、ですわ。璃兎、貴女の望むままに……」

「自由ねえ…………くはつ、それなら——このままでいつか」

「…………よろしいのですか？　月見君を残すとなると、我々との繋がりに彼らが気が付く可能性も」

「理由などどうにでもなりますわ。彼らに確かめる術などありませんのよ、三國…………
ただ、分かつてますわよね、カズヤ？」

「へいへーい」

その返事にくすくすと妖しく笑う。その笑みに、決定に、これ以上の意見を許されな

いことを知つてゐる三國は頷くだけだ。

「ではそのように」

やがて気配を一つだけ残し、室内は静寂に包まれる。闇の中、唯一残つた少女は、豪奢な椅子に深く身体を沈み込ませた。長い沈黙の後、朔夜は僅かに口角を上げる。

全てが動き出したことを悟り、その中に自身の席があることを感じて。

「宴の始まり、ですわ……」

その宴の結末がどうなるかは神ではない朔夜には分からぬ。人の遺伝子を操作するという禁断の領域へ立つ彼女であつてもだ。人である以上、未来などわかりはしないのだから。

しかし、『異端』である彼が一体どのような選択をするかによつてはあるいは……。

「願わくば、我が道が『絶対双刃』へ至らんことを」

アブソリュート・デュオ

セブンス・ブリット

G ゴールデンウイーク Wも終わり、今日からまた学校が始まると思うと憂鬱になる気持ちを抑えながら、生徒たちが食堂で朝食を食べている時間。自分は理事長室へと呼ばれていた。

「失礼しまーす」

間延びした、気の抜けた声とともにに入室すつカズヤ。目の前には大きなオフィスデスクを挟んで座る朔夜とその横に真っ直ぐ立つ三國。もう見慣れた構図だ。

「明日、転入生が来ますわ」

「……これまた唐突だな」

入つて来ていきなりそんなことを言われても返答に困る。しかし、この時期に転入生

？ この前『新刃戦』が終わつたばかりだと言うのに。

「てか、ここに転入つてことは……もしかして、俺みたいなのが見つかつた？」

可能性は無いことはない。第一、ここは普通の高等学校はワケが違う。一般的な高等学校でも転入など珍しいと言えるのに、ことなると自分のような『異端』ぐらいしか思い当たらない。

しかし、返答は少しの沈黙だった。

「……なんだよ」

余り表情の変わらない朔夜に気まずさを感じ始め視線を逸らす。

「……フォレン聖学園。ここ昊陵学園と兄弟校ですわ」

「ああ、そういうえばそんなこと言つてたような……」

確かに『新刃戦』の前の座学で先生が話していた覚えがる。と言つてもそんな深く掘り下げられた説明はされなかつたが。

英國^{イギリス}にあり、日本外で唯一『超えし者』^{イクシード}を育成する学校だつたはずだ。それなら転入の件も納得いく。

「なんだ、イジメでもあつたのか、ソイツ？」

転入の理由なんてそんな事例が多いだろう。それか、英國^{アッヂ}では手を付けられない問題児だとか。自分ではそんな程度しか思い浮かばない。

しかし、また返ってきたのは沈黙だつた。

「……んだよ、関係ねえなら戻つていい？」

正直、GW中はずつと不規則な生活をしていたため身体がだるいのだ。それと、朝から委員長である人物に叩き起こされ虫の居所が悪いのだ。

そんなこと朔夜にとつてはどうでもいい話だろうが。

「彼女もまた『異能』……いえ、『特別』と呼ばれる存在ですわ」

『エクセプション

『イレギュラー

『エクセプション

『エクセプション

』

『特別』。それを聞いて余りいい気はしなかつたのはある意味、スラムの時の経験で培つた勘が働いたのだろう。これから起きるのはきっと朔夜と初めてあつた時と同じ面倒ことだと。

正

骨折数ヶ所、全身至るところに裂傷、打撲は數え切れず。全治一ヶ月の傷を負つた友人のトラ。しかし、それは『超えし者』だからこそであり、常人なら全治数ヶ月の傷だ。その裏で仕事と称して生徒たちを狙い、暗躍していた月見によつて負わされた怪我の診断結果だつたのだが……。

「なんでトラが教室にいるんだ？」

朝食後の雑談を終えてそのままみんなで教室に行くと、見慣れた小柄な男子が机に

突つ伏して寝ていた。

「……退院してきたからに決まっているだろう、このバカモノ」
自分の眩きに耳聴く反応し、トラがあくびをしつつ伸びをする。

「退院まであと十日はあつたと思うんだが……」

「ふんつ、いつまでも休んでなどいられるか」

GW中、こちらが動けるようになつた段階で学園の敷地内にある病棟へお見舞いに行つたのだが、無様な姿を見せられるかと即追い返された。

その後で看護師さんから怪我の状態と退院予定日を聞いたのだが、どうやらトラのやつは強引に退院してきたらしい。

「無理しても怪我が長引いたらどうすんだよ。大人しく寝とけって。それにほら、寝る子は育つとも言……悪かつた、なんでもない」

「誰がちつこいか!!」

後ろで聞いていたみやびは怒鳴り声に怯えるように俺の後ろに隠れる。

「大丈夫だつて。今のは俺に突つ込んだだけだから」

「う、うん……」

ぎゅっと俺の服を掴んだままのみやびへ笑いかけると、一瞬目を見開き——ぱつと手を離したかと思うが早いか、一步後ろに下がつて謝られる。

「しかし、本当に大丈夫なのか？ 彼女にやられたキミの傷は相当な物だつた。九重の言う通り、無理はしないほうが身のためだと思うぞ」

「その言い草からすると、お前も事情を知つていいというか？」

トラの問い掛けに橘が首を縦に振る。あの日、月見の『牙劍』^{デブテヅ}を九十九が打ち砕き、トラたちを運んだ先で起きた橘とみやびに止む無く事情を説明し、学園側に連絡、そしてトラたちもふくめ怪我人全員へ応急処置をしてくれた。

…… 九十九の応急処置の手際が良すぎたことに面を食らつたことは今でも印象に残る。アソツにあんな特技があつたなんて。

その際、九十九の『焰牙』^{ブレイズ}——自分と同じ『異能』^{イレギュラー}としか説明していない——と機密

に関しても全て承知済みである。

「しかし、どうして月見先生はあんな暴挙に出たのだろうか」

「仕事と言つてたけど……」

あの後、そのまま三國先生に丸投げしたが実際どうなつたかは分からない。それに、あの時もし九十九がいなかつたら自分たちはここに立つことが出来ていたのだろうか。グッと自然に握り拳に力が入る。

このままじやダメだ。もつと力を高め無いと。

ふと、ユリエと視線が合う。どうやらユリエも似たようなことを考えていたのか顔が

強張つていた。

「つと、そう言えば九十九のヤツいなくないか？」

いつもこの時間帯なら机に座つて空を見ているか寝ているかどちらかの姿を見せる九十九が席に座るどころか教室にもいない。

「まさか、あのまま二度寝したんじゃないだろうな」

そう溢したのは桶だつた。朝食の時に確かクラス全員の所に行つて朝起こしに行つていたと話したこと思い出す。

九十九には悪いが、ありえそうだと思つてしまつた。

「まつたく、九十九と来たら後で注意しないとな…… つと、チャイムか」

鳴り響く始業のチャイムの音とともに開かれる扉。そういうえば、と月見がいなくなつたので新しい先生が来るはずだが――

「おつはよーん んみんな新刃戦の疲れはとれたかなー？ さー今日からまたビシバシいつちやうよー」

「「「なつ!?」」

うさぎ耳を着けたあの女——月見璃兎つきみりとが何食わぬ表情で入つて來たのであつた。

事情を知っている自分たちは困惑するなか授業は終わり、そのまま退出していった月見を追いかけたのだった。

「待て！」

「あれあれー？　どうしたのみんなして？　もうすぐ授業の時間だよ♪」
その笑顔のと、いう仮面の下の顔を知っている自分たちには隠す必要はないのに、いつもの口調で接してくる。

しかし、自分たちがいつでも『焰牙』^{フレイズ}を出せるように身構えていると――

「――くはっ、そんなこエ顔すんなよ。朝から滾たぎつちまうじやねえか」

本性を現した月見が舌なめずりをした。

「なんでアンタがここにいる……ツ!?」

「ダメだよー九重くん。先生にはきちんと敬語を使わないとね♡」

「殺されそうになつた相手に無理言うなよ！」

それを聞いた月見は笑いを堪えながら答える。

「くはっ、ちげえねえ……が、今は辞めとこうぜ。教育熱心の理事長さんのお出ましだ」

そういつた月見の視線、つまり、自分たちの後ろを振り返ると三國先生を連れた理事

長の姿があつた。

卍

「どういうことだ!?

トラが机を叩いて理事長に抗議をする。

あの後、そのまま事情を説明するためには理事長室に連れて来られ、そこには既に九十九がソファで寛いでいた。しかし、どこか憔悴しきつたように見える。

「月見璃兎を改めて教師として雇用した、そう言つたのですわ」

「待つてください！　アイツは俺たちを殺そうとしたんですよ!?

「ですが貴方たちは生きていますわ。彼女ほどの強者つわものと相対していながら、短期間で生徒をそこまで育て上げた教育者としての手腕を私は評価していますの」

理事長の話すことに戦慄を覚える。犯罪者、ましてや殺し合いをした相手をまた教師

として雇用するとは正気の沙汰とは思えない。

「いいねえ、スバルタ歓迎ってか？」

「氣分を良くした月見は横から茶々を入れて來た。それを睨み付けながらも橘が進言する。

「しかし、それは結果論にしか過ぎないのでしょうか？」

「その結果をこそ私は求めています。如何なる過程を辿り、どのような手段を用いようと問題ではありません」

「それだと、どんな卑怯、または外道なことをしようと結果を出せば問題無いと公言したようなものである。いや、實際そうなのかも知れない。

「全ては『絶対双刃』^{アブソリュート・デュオ}へと至らんがため。ただそれだけのこと」

今ここでハツキリと理解した。彼女はその『絶対双刃』^{アブソリュート・デュオ}の為なら何でもする人物だと。

「それと、近日中に貴方がた六名の『位階Ⅱ』^{レベル2}への『昇華の儀』を執り行いますわ」

「フツ、口止めのつもりか」

それに理事長は薄く微笑む。

『新刃戦』で優秀な成績を残した者たちへの当然の権利のこととしてよ」

「つ……」

当然のように言われ口を塞ぐ全員。嫌なしこりのような物を残して退出するのだつた。

その後は何事も無くいつもの日常が終わつた。終始、委員長やら主人公やらがこちらを気に掛けるような素振りをしていたが、こつちは取り合う気がまつたく起きず、そのまま無視しつづけた。

そして、翌日。朔夜に言われた通り指定された時間に執務室に赴くと既に眼鏡野郎と一緒に朔夜が待つていた。外からはヘリと思われる駆動音が鳴り響いている。

「ヘリで来るとは思わなかつたぜ」

「アナタにとつては初めて見ることになりますわね」

「……バカにしてんのか」

「流石にヘリぐらい見たことあるわ。……ここまで近くで見ることは無いだろうけど。

「さあ、行きますわよ」

朔夜に歩調を合わせて中庭に出る。それと同時にヘリは降下を終え着陸した。ロー

ターが巻き起こす風が朔夜の艶やかな髪を揺らす。

そんな中、ヘリから黄色イエローバース金色の髪を持った少女が姿を見せる。その彼女を見ながら朔夜は妖しく微笑えんだ。

「ようこそ、昊陵学園へ。『特別』——リーリス＝ブリストル』

エイス・ブリット

「あんたが『異能』——九重透流ね」

開口一番、転入生が発した言葉がそれだ。

時は約一分前へと遡る。『昇華の儀』が行われる土曜日の朝。H Rホームルームが始まる前、ギリギリに来た九十九がげつそりとした表情で耳に呴いた。

『今から来るヤツには俺が【異能】ってことは内緒な。マジで頼む』

そのいつもよりやつれた顔で珍しく真面目に話してきた時はどうしたものかと思った。他、いや大半がその九十九の姿に驚いただろう。いつものように制服を着ており、髪はいつものようにぼさぼさんてもんじゃない。丁寧に櫛を通して整えていた。

ただ、目の下の隈とその仕事終わりのサラリーマンのように疲れ切った表情が無ければ完璧と言えるだろう。

驚き、そして、先ほどの言葉に疑問を思つて訪ねようとした時だ。いつものように猫を被つた月見が入ってきて H R が始まってしまったのだ。

そして、月見が転入生を紹介すると口にした直後——ほとんどのクラスメイトが息を

呑んだ。……あのトラですら。

教室に入ってきたのは、イエロートバーズ 黄金色と蒼玉の瞳を持つ外国人の美少女だつた。

髪と瞳だけではなく、出るところは出て引つ込むべきところは引つ込んだ海外女優顔

負けの魅惑的なスタイルは、男子のみならず女子にもため息をつかせる。

……一心底疲れたため息をついた者もいたが。

加えて貴賓と色香を漂わせており、赤い紅を差した唇がそれをより強調させていた。

同じ外国人の美少女でもユリエが闇夜に浮かぶ幻想的な月だとしたら、彼女は大空に輝く太陽といった印象だ。

そんな彼女が片手を腰に、もう片方は手を机に置き、正面からじっと俺を見つめていた。

「……ちょっと、人の話聞いてる?」

「——っ! わ、悪い。お俺が九重だけど……」

「オッケー。九重透流、あんたに興味があるの。だからちょっと付き合いなさい」

つい一月ほど前に似たような発言を耳にしたが、今回は言葉つきこそ柔らかくあるものの命令口調だ。黄金の少女にとつて自分の意志が通ることは当然だとばかりに、俺の返答を聞かず踵を返して歩き出す。

「お、おいつ。いきなり付き合えって言われても——」

「……二度も言わせないで」

足を止め、振り返つての一言。

静まり返つた教室で、チラリと九十九の方を見ると口パクで「いけ」と繰り返している。彼に一体何があつたのだろうか。

そして、最初に口を開いたのは少女だつた。月見の方を見て言う。

「特別に許可して貰えるわよね、月見先生」

「……どうぞー☆」

一瞬、額に筋を浮かせつつも、月見は転校生の勝手を許可する。あの月見が許すとは思つて無かつた。

「……透流に用があるならここで話せばいいだろう」

トラが苛立つた様子で転校生に物申すが――

「あんたには関係の無い話なんだから別にいいでしょ。あたしは雑音ノイズの無いところで話がしたいのよ」

びしやりと言い返される。普段なら怒声が飛んで来るだろうが、彼女の一言、一睨みで気圧され、小さく呻くだけに留まるトラ。そして、何故か視線は九十九の方へ向き目を細める。

「そちら辺をちゃんとおいて欲しいわね」

「……うす」

びくつと目元を引きつかせながら返事をする九十九。ますます、彼女とは一体どういった関係なのか気になつて来た。

「まあ、ちょっと行つてくる。話だけならすぐに終わるだろうしさ」

トライに小さく笑いかけ、席を立つ。一応、担任の許可を出した以上、無理に断る理由は無い。黄金の少女とともに、俺は教室を出て行つた。

二人——主に彼女——が教室から出ていつたことを確認したのち、すぐ机に身体を預け腹の底から声にもならない息を吐き出す。

わざわざ、身だしなみを整え。わざわざ、早起きをし。わざわざ朝早くから準備に取り掛かつた。それは、全てあの転入生のため——では無く。もっぱら専ら自分の為だつた。

彼女、リーリスを見た瞬間、記憶の奥底に眠つていたものが蘇り思い出したのだ。彼女は主要人物の一人で主人公の『異能』イレギュラーという物に固執していたことを。自分はイレギュラーではあるが『異端』イレギュラの方である。

自分はここに立つていて、息をしており、心臓も動いている。つまり、この世界が想

像によつて生み出された物だとしても自分は生きている。だから別に原作がどう変わらうとしつたことではない。

しかし、従来、いや前世というものがあるならば。前世も含め出来る限り面倒ごとは避けていきたいタイプだ。

故に、『異端』^{イレギュラー}と言つても彼女からしたら『異能』^{イレギュラー}とそう違ひは無い。きつと彼女は何かしらの接触をしてくるだろう。現に朔夜との関係やたつた一人の『絆双刃』^{デュオ}であることを知つてゐる。幹部の娘だからかは知らないが情報網がヤバイ。

従つて、今回ばかりは朔夜にひたすら頭を下げて自分の『焰牙』^{ブレイズ}の事を隠してもらうことにした。元々、朔夜もリーリスとの『絆双刃』^{デュオ}を考えていた節があるようで間一髪だつたと言える。もし、無理やり通そうものなら何もかも投げ捨てて全力で逃げることを伝えるとあつさりと快諾してくれた。

朔夜も自分ほどの研究材料を手放したくはないようだ。今まで自分の『焰牙』^{ブレイズ}の事や『黎明の星紋』^{ルキフル}を打たれてない、いわば天然物という情報を公にしてないからこそ、今回事に關しては信用できる。最も、自分から言うのであれば問題無いと言つてゐる分そこまで隠し通す必要は無いようだ。

だからこそ、自分の『焰牙』^{ブレイズ}がバレれば面倒ことが増えると確信している。朔夜ほどの人物と対等に話が出来るほど親密な関係であるが故に。

なら、どうして早朝から疲れているのか？ それは朔夜から隠すことを条件に課された指令のせいだ。

リーリスの動向を探ること。ただ、それだけ。

彼女がこれから何をして、何を得るのか気になるそうだ。別にそれなら簡単なことだが朔夜の嫌がらせなのか、それとも気遣いなのか……いや、朔夜に限つて気遣いとうことは断じてない。嫌がらせの類のはずだ。

表向きに表すなら一学年を代表して転入生に学園に案内、兼、学園に慣れることと生徒として馴染むまでの支援、と言った所だろうか。ここに来てあつたかも分からぬ主席などという単語を持ち出してきたほど。

最も、彼女からは余り良く思われてないが、こここの理事長という立場の朔夜から言われたことだからか。彼女の言葉を借りるなら使つてあげている、ということなのだろう。

自己中心的な考え方の典型的なお嬢様なので、前世も含め平民、いや、今回に関しては平民より下だつた自分からしたらどう接していいのか分からぬ。

朝早く起きたのは九重透流に関するレポートを出せ、などという訳の分からぬことを言われ、取り敢えず、何とか書いたものの「ふくん」と言われただけ。実際に確かめる気だつたなら最初から言うな、つて話だ。

もうグロッキーでストレスは溜まり、今から発散させたい気分だ。もし、これが後一ヶ月続くようであるなら自分は早いうちに彼女の目の前でシェルブリットを開放し、殴りかかっているかも知れない。

しかし、そうなると本末転倒。だからこそこの先どういった展開になるか覚えてないが、主人公のことだ、きっといい方向に進んでくれるだろう。しかし、なぜ彼女は『異能』イレギュラーに固執しているのだろうか？

……それを探る前に自分の『焰牙』ブレイズを知っている委員長たちに口止めしなければ。ここに来て初めていろんな意味で頑張ろうと思つた瞬間だった。

卍

「ん、美味しかったわ、サラ」
「……恐れいります、お嬢様」

黄金の少女——リーリスがカツプを悠然とした動作で置くと、それまで無言だった執事が初めて口を開いた。側に執事を連れているところから見れば分かると思うが結構な家柄なんだろう。

だが、そんなことはまとめて聞けばいい。

「さて、本題」

自分を指差し、耳を疑うようなことをさらりと言つてのける。

「九重透流。今日からあなたはあたしの『絆双刃』^{デュオ}よ」

「………は？」

出会つて一時間と経つていない相手から、突然お前は自分のパートナーだと言われ、呆気に取られている以外の反応はあるんだろうか？

「今、何て……」

「二度は言わないわ」

「いやいや、ちょっと待ってくれ。俺にはもう『絆双刃』^{デュオ}がいるから突然そんなことを言われても困るし、そもそも一度組んだら卒業までずつとそのままだっていう校則があるだろう」

「関係無いわ。あたしは『特別』^{エクセプション}だもの」「『特別』^{エクセプション}？」 聞き覚えのない言葉を反芻する。

「……だからといつて初日から授業へ出ないのは困りますわ、リーリス＝ブリストル」

突然割って入つて来たのは漆黒の衣装^{ゴシックドレス}に身を纏つた少女が白い薔薇を背景に佇んでいた。

「ご機嫌よう、九十九理事長。ここはいい場所ね」

「嬉しいお言葉ですわ、リーリス。けれど今はティータイムではなく授業中ですよ。よ。

これでは彼の尊厳がありませんわ」

「そこは特別つてことで勘弁してよ。それに、その彼……余り使えないわ。特例だつて聞いて期待したけどやつぱり凡人ね」

「彼、とはもしかして九十九の事だろうか？ それにしてはいい言われようである。しかし、アソコのことを凡人呼ばわりするとは……先ほどからいっている『特別』には一体どのような意味があるのか。」

咎めるような理事長に対し、リーリスは俺へ指を指しながら返す。

「だいたいあたしは彼に会うためにイギリスから飛んできたんだから授業なんてどうでもいいの。それより理事長も一緒にどう？」

「……頂きますわ」

理事長は小さくため息をもらすと、チエアへと座つた。執事が新たにミルクティーを

入れて いる間に自分は先ほどリーリスの発言で気になつたことを口にする。

「なあリーリス。今の言い方からすると、まさかあんたは俺を『紳双刃^{デュオ}』にしようってだけで転入してきたのか? どうしてそこまでして俺を……?」

「あたしとあんたは同じ『唯一無二^{アンリヴァルト}』。だからこそ、このあたしの『紳双刃^{デュオ}』として相応しいあんたに礼を尽くして出向いて来たのよ。感謝しなさい、九重透流^{デュオ}」

「いや、感謝しなさいって言われても、俺にはもう『紳双刃^{デュオ}』がいるつてさつきも言つただろ。それに校則も——」

「二度も言われなくともわかってるわよ。だけどね、九重透流。あんたが言つてるのは、原則的に話でしょ」

以前、月見から教わつたことがある。よっぽどの理由が無い限り、という話を。つまり、九十九などがそのよっぽどの理由に当たるのだろう。

「つまり、規定の枠から外れていれば新たに『紳双刃^{デュオ}』を組み直していくわけ。例えばパートナーとの『位階^{レベル}』が離れすぎたとかね」

リーリスは口元へと指を当て、笑みを浮かべる。

「そしてあたし——『特別^{エクセプション}』は規定の枠に縛られない」

『特別^{エクセプション}』つていうのが一体何なのかなは俺には分からない。だけど、そんな我が儘とも言えるようなことが許されるのか?」

「許されるわよ。……ねえ、理事長」

昊陵学園において、最大の権力を握つ理事長に視線を向けるリーリス。理事長は無言のままミルクティーに口を付けて、中が空になつてから沈黙を破つた。

「……九重透流。あなたが望むのであれば、現在の『紺双刃^{デュオ}』を解消すること、昊陵学園理事長の名において特別に認めてあげますわ」

「なつ……!?」

「ほらね」

自分の反応とは対照的に満足そうな笑みを浮かべるリーリス。

「……どうしますの?」

今の『紺双刃^{デュオ}』を——ユリエとの『紺双刃^{デュオ}』を解消するか否か。

「そんなこと、考えるまでもないです」

「決定ね」

理事長からリーリスへと視線を移し、俺ははつきりと自分の意志を伝える。

「ああ、決定だ。俺はリーリスと組むことを望まないから、今の『紺双刃^{デュオ}』を解消しない。

それが答えだ

「なつ……!?」

驚きに満ち、啞然とした表情で固まつたままのリリース。対して理事長は、静かに笑

みを浮かべて頷く。

「貴方の意志、確かに承りましたわ」

「それじゃ俺はそろそろ教室に戻ります。失礼します、理事長」

軽く一礼して、俺は立ち上がる。

「じゃあな、リーリス」

「——っ!? ま、待ちなさいよ、九重透流!! あんた今、何を言つたのかわかつてゐるの!?」

「ああ、わかつてゐるさ。答えはノ一だ、俺はリーリスとは組まない。あんたの言葉を借りるなら、二度も言わせないでくれ、だ。それに、俺じやなくて九十——」

『今から来るヤツには俺が【異能】イレギュラー』つてことは内緒な。マジで頼む』

「——いや、なんでもない」

絶句と自分の匂わせる発言に不信感を覚えているような表情をするリーリスに背を向け、俺は早足に教室へと戻った。

なるほど、九十九があそこまでした理由が分かつた。しかし、それを自分に押し付けるようなことをした九十九に嫌みを覚える。が、朝の九十九を見て少し同情した。

ナインス・ブリット

早朝、それも休日の日だつた。

別にショッピングに行くことは構わない。そんなこと自分の勝手だ。しかし、それに巻き込まれる身にもなつて欲しい。

「何故、アナタが付いて来るのかしら」

「誰のせいだと思つてんだ」

もう、何というか周りから見たら目が死んでいるガラの悪い男が、金髪美少女の後ろに着いて回るのは、通報されても可笑しくない案件であつた。もし、昊陵学園の制服を着てなかつたら通報されていたかもしれない。

何時もなら側に仕える執事がいるが置いて来たらしい。執事も主の命令には逆らえずどうしようか朔夜に助けを求めたところ、今ごろ惰眠を貪っていたであろう自分に白羽の矢が立つたわけだ。

最近は、主人公が上手くやつたのかどうか知らないが、あれから特にリーリスに付き合う必要が無くなり、溜まりにたまつたストレスを運動や美味しい食事などによつて少

しづつ解消していく矢先にこれだ。

後は睡眠をとるだけだったのに、こうして早朝からお嬢様に付き合わされるのだからまたイライラが溜まつていく。いつそのこと今ここでシェルブリットを開放して、スッキリさせたいほどだ。それも、新刃戦以来使つてないのだからうずうずしている。

最も、外出する生徒達の意識を徹底させるため、外出届を出す際には外でトラブルを起こさない、『焰牙』^{ブレイズ}を具現化させない等々、念を押される。

が、彼女はどうやら外出届を出していなかつたため、二人分の外出届を書くはめになつた。しかも、自分には朔夜から直々に念を押されている分もあつてフラストレー ションの一歩手前だと思う。

ふう、まあ、落ち着け。クールに行こう。年頃の女子の買い物ぐらい付き合つてやるのが大人の対応つてもんだ。そうだ、帰つたら朔夜に頼んで人気のいない場所でシェルブリットを使う、そうしよう。

そう思うと何だか少し気持ちが楽になつた。あと少し頑張ろうと奮起させながら彼女の後を付け――

「――いねえし!? はツ!? どこ行きやがつたアイツ!?

本格的にあのお嬢様を一発殴りたい気持ちが全面的に表れた瞬間だった。

とはいえる、そう遠くまで行つてないはずだ。見失つたのは少々痛いことだがあの目立

つ彼女のことだ。この日本人だらけの場所であるのならすぐ見つけることが出来るだろう。

「ナンパでもされたらどうなるやら……」

思わずゾッとする。ナンパされる、ナンパしたヤツらがやられる、後始末をするのが俺になる。この流れが嫌なほど鮮明に想像できてしまった。もう末期かもしれない。

そんなことを思っていたときだ。この店は三階から一階が見える吹き抜けの構造をしている箇所があり、今いる二階から下の階が見える。一瞬、私服だつたため分からなかつたが、見知った顔が男たちに絡まれていた。

少しナンパされた方がこのさい探す手間も省けて楽かな、と思つていた矢先にまさか同級生がナンパされているとは思いもしなかつた。あれは確か……橋と穂高だつたかな？ ん？ あつちが穂高だつけ？

最近、やつと人の名前を覚え始めたがまだ顔と名前が一致していない。何故、こんなにも覚えられないのか自分でも不安に思つたものだ。否、リーリスのせいだ。朔夜のせいだ。記憶に残る二人のせいで覚えられないのだろう。きっとそうである。

と、変なことを考えていると何だか不穏な気配になつてきていた。流石に見過ごすのは気が引けるがリーリスの件もあるし、周囲を見ても下の階に降りるエスカレーターや階段が無い。エレベーターでは遅いので、残すはガラスの仕切りを飛び越えるしかな

い。

しかし、目立ちはくはないので手をこまねいていると、自分にとつて、彼女たちにとつても見慣れた人物が人垣を搔き分け現れた。

「やめる、お前らっ!!」

「何だ!?」「誰だテメエ!!」

何ともグットタイミングで颯爽と現れた主人公だつた。ナイスだ、九重。そのままリーリスから俺を救つてくれるのことを待つてゐるからな。

……一体、自分は何を訳の分からぬを。割と真剣^{マジ}で自分の置かれている状況をどうにかしないといけないようだ。このまま行くといずれ見境なく殴りかかりそうでヤバイ。

いやいや、自分のこたあどうでもいいんだよ。今は目の前の現状だ。トラブルが起るのは確定だと思える。とはいえ、チンピラどもの動きなど『超えし者^{イクシード}』にとつて赤子の手をひねるように簡単だろう。

しかし、俺のいたところなら有無も言わせずに襲いかかつてくるような奴等ばつかりだつたので、何だかチンピラが普通の人見えてきた。いや、普通の人で変わりはないのだが。

「軽くボコッちまおうぜ！」

リーダー格が喋ると同時に、男たちは僅かに腰を落とす。九重に殴りかかろうとした瞬間だつた。

タアン……!!

乾いた音——銃声がモールに響いた。咄嗟に身を屈め直ぐ音のした方を見る。柱で見えないがこの階で直ぐ近くに撃つた本人はいる。

こんな所で銃だと? 持つているヤツを見たらすぐ分かるんだが……：勘が鈍つたか。それとも見てなかつただけか。取り敢えず、リーリスを探すどころの話じやない。

身を屈めながら銃声がした方に近づいていく。何かしら硬い物、金属とかがあれば一番いいのだが、周りを見てもプラスチック性の物ばかり。

あそこにいた時は必ず鉄板などを持っていたが、学園に来てから撃たれる心配など無かつたから身に着けているわけも無い。

いざとなつたらシエルブリットを使うこともやむを得ないことを頭の中で考え、撃つたヤツを確かめようと柱から身を出した。

「……お前、なにやつてんの? 何やらかしてくれてんの?」

そこには『焰牙』^{ブレイズ}と思わしき、銃を持って仕切りの上に立つリーリスがいた。

「……アナ、これを見て何とも思わないの?」

「ハア? 『焰牙』^{ブレイズ}だろうがア? それがどうしたつてんだよ、今更」

「つ!? ア、アンタ分かつて無いの!?

そこまでバカじやねえよ。バカにし過ぎだろこのお嬢様。殴つてもいいよね? これもう殴つていいよな?

「チツ、人が集まつて來たな。ショッピングは終わりだ、急いでここを離れねえと
素早くリーリスの腕を掴み走り出す。

「ちよ、キヤツ!? は、離しなさいよつ!?

抵抗を見せるがそんなこと関係無しに引つ張りこの場を後にするべく急いだ。

「大体、お前がいなくなつたり人前で焰牙『ブレイズ』とか出さなければ、こんな逃げる
ようなことしなくてよかつたんだよ!」

「私は『特別』なのよ! 問題ないわよ!」

「こつちがメンドくせエことになんだよ!!」

「結局、自分の保身のためじやない! 関係無いわ!!」

「うるせえ! いい加減にしやがれ——」

「アナタこそ! いい加減しなさいよ——」

——コイツ、戻つたら絶対許さね工い!

初めて意見が一致した瞬間だつた。

卍

嵐のように去つて行つた二人を啞然とした様子で見ていた透流たちは、元に戻るまでの少しの時間を見た。

いや、二人のやり取りもそうだが、それより気になつたのがあの時、彼女の手に握られたのは長銃身の黒き銃。

あが、彼女の『焰牙』!?

脳裏に甦るのは、月見に襲われたとき見た九十九の『焰牙』。

『焰牙』は複雑な構造を持つ武器として具現化は出来ない

その話に嘘は無く、本来ならば『銃』や九十九のような焰牙など有り得ない。

「……『特別』」

あれからひと悶着あつたものの何事も無く時間は過ぎ、翌日になつた。

教室に入ると、九十九が朝から異様な雰囲気を纏いながら、何時ものぼさぼさとした髪に着崩した制服で朝座つていた。入つた当初の彼に戻つたように思えた。

しかし、あの近寄りがたい雰囲気は入つた当初より増している。

「トール、九十九はどうしたのでしょうか？　何時もよりも増して顔が怖いです」

「は、ははっ……ユリエ、それ本人に言つたら駄目だからな？」

「？　ヤー、分かりました」

自分もハツキリとは分からぬが、多分リーリスのことだろう。元々、リーリスが来た当初からずつとイライラしていたが、髪も制服も着崩しているところから見るに、もうリーリスに関わらずによくなつたと思われる。

今まで一緒にいたが、九十九は意外と根が眞面目だ。やることはちゃんとするし、言われたこともちゃんと守つてゐる節がある。だからこそ、リーリスの件も眞面目に言われたことをしていたと日頃の生活から見て分かつた。

ただ、やはり相性的に良くなかつたのだろう。ああいう性格に対してもリーリスはある意味毒だと思った。

……。

「トール?」

九十九に、いや、カズヤに近づいて話し掛ける。

「なあ、カズヤ」

「あア? 何だ、九重か。どうした?」

こうイラついていてもちゃんと話を聞く姿勢を取る辺り、やはり眞面目だと思う。

「リーリスと『絆双刃^{デュオ}』を組む気は無いのか?」

リーリスと言う単語が出た瞬間、チリチリと肌を刺すような空気が増した。少し直球過ぎたかもしれない。数秒、いや、自分には数分間程ずっと睨まれていたようにさえ思う時間は直ぐにカズヤの言葉で動き出した。

「……あれは、無理だ。絶対無理。あっちが譲歩しない限りな。てか、俺のこと喋つてねえよな?」

ギロリと睨まれ、少し怯みそうになるのを我慢して首を縦に振る。そして、見てから溢すように言った。

「お嬢様はお前のことを^ゞ指名してんだから……九重、お前がどうにかしやがれ」「お、俺が?」

どうにかしろ、と言われてから色々と考えてはいるが、授業や訓練に参加していないものだから、まず会うことが無いから話すことも出来ない。

どうしたものかと思いながら、昼休み終了間際のことだつた。

今日も今日とて体力強化訓練のために校門へ向かう途中、ふと金色の輝きが視界の端に映り足を止めた。

「トール？」

先を歩いていたユリエが、チリンと鈴を鳴らしながら振り返る。

「悪い。ちょっと先に行つてくれるか、ユリエ」

ユリエが頷くと、光が見えた先——寮のバルコニーへと向かう。ラウンジから外に出るとテーブルに着き優雅にミルクティーを味わうリーリスの姿があつた。

「……ここにテーブルなんてあつたっけか？」

「サラに用意させたのよ」

リーリスは後ろに控えている執事へ僅かに視線を送る。

「それより何か用？ やっぱりあたしの『絆双刃^{デュオ}』になりたいって思い直したの？」

「悪いけどそうじやない。もうすぐ体力強化訓練が始まるけど行かないのかつて思つてさ。授業にも訓練にも顔を出さないから、月見……先生がかなりキレてたぞ」

「別にいいわよ。あたしはそんなものを受けるために日本に来たわけでもないもの」

「そうは言うけど勉強はやっぱ大事だし」

「高校程度の勉強なんてとっくに済ましてるわよ。『超えし者^{イクシード}』になるにはこの学校へ入学するしか無いから籍を置いているだけ」

「す、すげーな……」

リーリスにせよユリエにせよ、どうやらウチのクラスの外国人は大変成績が優秀らしい。

「だけどそれなら——」

「せめて訓練ぐらいは出た方がいいんじゃないか、という言葉を遮られる。

「あのね。なんであなたにそんなこといわれなくちゃいけないわけ？」

「なんであつて——みんなと一緒に過ごさなかつたら、クラスで浮いちまうかもしねりないぞ。そうなつたら友達が出来ないだろ」

もう浮いてる気はするが、まだ挽回できる段階だと思う。

「……お人好しね、あんた」

「べ、別に普通じゃないか？」

「女の子を庇いに飛び込んだみたいだし、十分お人好しだと思うけど？」

「仲間を助けるのは当然だろ」

「……ふうん。嫌いじゃないわ、そういうの」

蒼玉の瞳サフアイアブル

「そ、そうだ。聞きたいことがあるんだ。カズヤとは『紳双刃デュオ』を組む気ないのか？」

「すると、こちらも朝のカズヤのように露骨に機嫌が悪くなるのが目に見えた。

「あ、いや、ほ、ほら！ アイツも独りだし、ただ者じゃない……から、さ」

語尾が段々と小さくなつたのは執事に睨まれてることに気が付いたからだった。

「……ええ、平凡じやないことは理解できたわ」

「え？」

そのリーリスの評価に驚きを隠せない。

「じゃ、じゃあ——」

「——でも、絶対無理よ。彼とはね」

「一体、二人の間で何があつたのだろうか。気になるにつれて、聞いてはいけないような氣もしてきた。

「あ、そうだ。九重透流、今からあたしに付き合いなさい」

「付き合えって……このあと授業が——」

「二度は言わないわよ」

まるで先日の再現に、俺はリーリスへ声を掛けにきたことを少しばかり後悔した。

